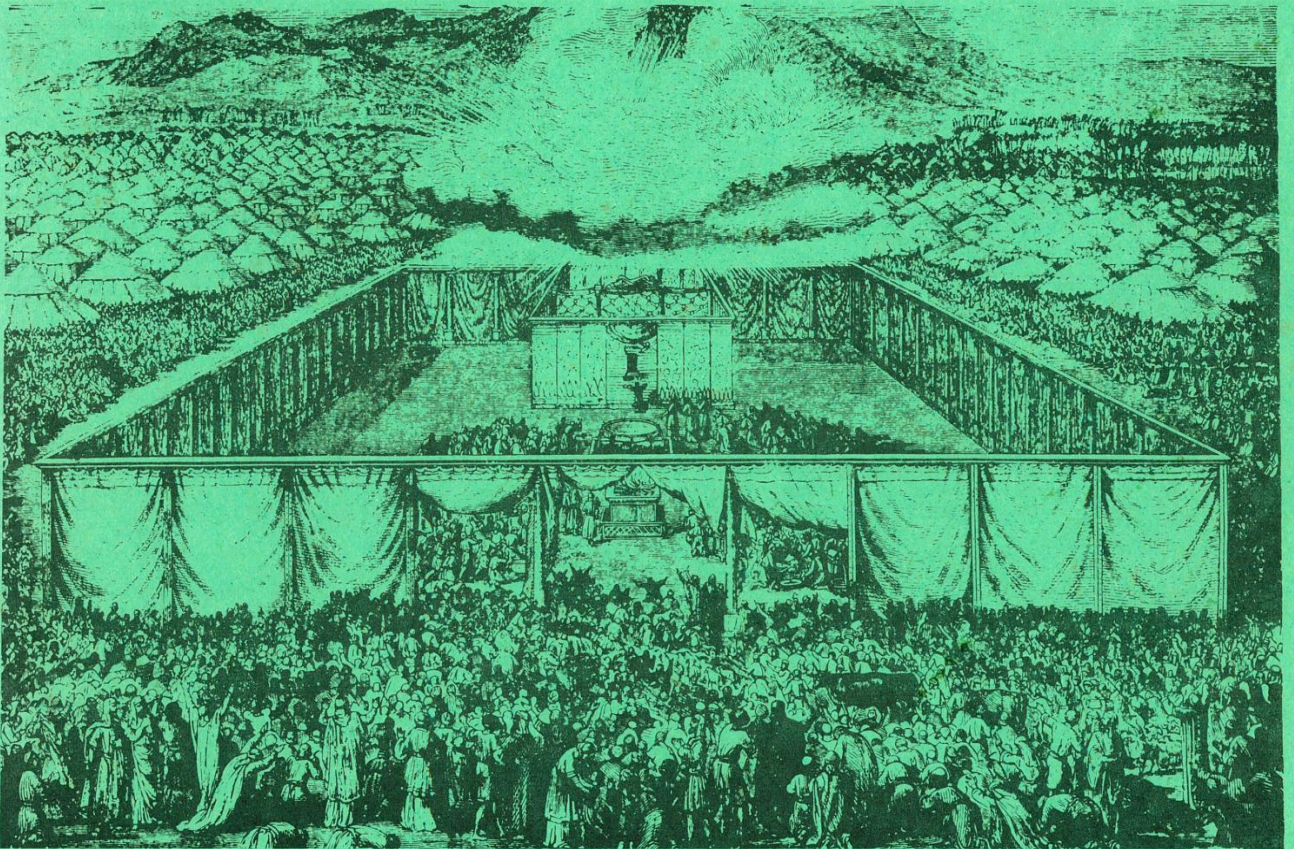




Anchor

アンカー



『神よ、あなたの道は聖所にあり。』詩77:13 (英)

『われわれは今、大いなる贖罪の日に生存しているのである。』

大争闘下 224

この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし
不動にする錨(いかり)であり、かつ『幕の内』にはいり行かせる
ものである。

ヘブル 6:19

第4号

★目次★

アンカーの目的	1
略号の説明	2
キリストの性質	3
信仰から学ぶ教訓	7
人の創造	9
レビ記に見る三天使の福音	15
イエスの品性の美しさを仰ぎ見る	24
1888年のメッセージとは何か	27
ニュース	36
編集後記	39

◆アンカーの目的◆

アドベンチストの中に三つの大きな曲解がある。

1. 三天使の使命の曲解
2. ダニエル書8：14の聖所の清めについての曲解
3. 預言の霊についての曲解

我々は次の事を信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使のメッセージである。(6T p.384, 2SM p.142)
第三天使の使命が再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。

(9T p.98, GC II p.140)

2. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の特別な贖いを受け
る。

(EW p.414, 5, 7)

3. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以
来。

(RH 8/26, 1890)

4. ダニエル書8：14 — 聖所の解明に御業の完成はかかっている。

5. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。

6. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は三重の天使の使命、聖所、
安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。

(EW p.417, 1T p.300)

7. アンカーにはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世
界に完成する最後の時代と信じる。不信仰によって、140年も時は延ばされ、イエスの十字架
の苦しみを増している(GC II p.182, Ed p.328)。信仰の義認の体験によって、再臨を早める
ことをキリストは待っておられる。再臨と御業の完成をこれほど遅らせているのが我々神の民
であるとするならば、我々の今日の義務は何なのか、約束のものを受ける条件は何なのかを研
究し、共に備えたいと思う。

キリストの性質

それはあなたにどんな意味を持っているか？

20年以上前に、私がアンドリュース大学で牧師のための勉強をしていた時、同僚の一人がホールで呼び掛けて私に質問をした。それはキリストの性質についてであり、彼は罪への傾向を持っていたか否かということであった。私は知らないと答えた。それが本当に重要な問題なんだろうか戸惑った。問わなければならない質問は「それは私と何の関わりがあるか？」ということであった。

ある時、教会歴史のクラスで、初代教会会議のことについてのディスカッションがなされた。問題はキリストは100%人間であったのか、100%神であったのか、それとも100%両方であったのかということであった。またそこでもそれがそんなに重要な問題なんだろうかと思った。問われなければならない質問は「それは私と何の関わりがあるか？」ということであった。

約5年前に、現代の真理はこのことを正しく強調しているかが確かでなかったので、第三天使の使命を研究する決心をした。真理は単純でなければならないし、サタンは問題を混乱させるために懸命に働くことを知っていたので、他人のためではなく、自分のために明確にしたいと決意した。さらに十分な理解を得て、現代の真理で強調する必要があると思ったので、本を書くことにした。私は日本に住んでいたため、アメリカの教会でどんなことが起こっているのかということにはいくらか疎くなっていた。教会の中で、ある教理の論争が白熱化していることを知らずにいたので、引き出した結論は殆ど自分のものである。現代の真理を研究しているうちに、何故キリストの性質がそんなに重要なものであるのかがわかってきた。それが私とどんな関係があるのかがわかってきた。

かくも重要な主題を研究し始めてしばらく経つと混乱してきた。引用文を全部集めた時、あるものは矛盾のように見えたので、カードに見つけられるだけ全て書いてみた。するとイエスがどれだけ我々人間のように扱われるかという問題に気付いた。我々と同じようであるなら、どのように、どの点で同じなのか、我々と違っているなら、どのように、どの点で違っているのか？そこで私は、彼がその性質において我々と同じだと言っているように思える全てのカードを一箇所に、我々と違っていると思えるものは別の場所に集めてみた。それは生易しいことではないことがわかった。それでもなお矛盾しているように思われた。そこで私はある真理を見つけたら、それはきっと全ての引用文をうまく調和させるはずだという観点から調べてみようかと決心した。

論ずる前に、二つの問題を提起したい。このアンカーの記事では、第一の質問を取り扱うことにする。第二の質問は付随する他の問題と一緒に次号で扱うことにする。

- 1) キリストは神であったのか、人間であったのか、それとも両方であったのか？それは私と何の関わりがあるのか？
- 2) 彼の性質は我々と同じであったのか、そうではなかったのか、どのように、どの点でそうであったのか？それは私とどんな関係があるのか？この質問は次号に回すことにする。

100%人間か、100%神か、それとも両方か？

今回は第一の質問だけを取り扱うことにしよう。キリストが100%人間か、神か、それとも両方なのかということに関しては、我々はただよく知られているヨハネ1章の聖句を見ればよい。これはイエスが神であり、全てのものの創造者であられることを明確に述べている。彼は神の子であられた。彼はまたマリアという女から生まれた赤子であったので、人間であられた。彼は人の子であられた。「そして

言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。……」（ヨハネ1：14）神の使命者は次のように言っている。

「キリストは本当に人間の性質を所有しておられた。『子たちは血と肉と共にあずかっているのに、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる』彼はマリヤの子であった。彼は人間の子孫にしたがってダビデの子孫であった。」クエシオンズ オン ドクトリン p653

ここで我々は各々自問してみる必要がある。「これは私とどんな関わりがあるのか？」と。答えはこれである。—もしキリストが我々の持っていない、あるいは持ち得ないある力、特質を持っておられ、我々とあまりにも違っておられるなら、彼は我々の模範とはなり得ないのである。つまり、我々が十分に、完全に模倣することの出来る模範にはなり得ない。我々はどの程度キリストを模倣することが出来るのか、キリストの品性がどのように模倣され、再現が実現するのか、いつ、その模倣が完成するのかということは、セブンスデー・アドベンチストが世界に負っている課題である。これこそ第三天使の使命であり、この時代のメッセージである。それはさばきの時のメッセージである。それは、この世界の終末時代に世界に伝えるべく神が与えられたメッセージである。

もし、イエスがあまりにも高い所にいます神であり、完全に人間でなければ、また、もし彼がその領域だけで生き、教えられたのなら、我々が神でない限り、我々は彼のようにすることは出来ない。

また一方、もしキリストがただの人間に過ぎなかったのなら、どうして全人類のための完全な身代わりとなることが出来ようか？もし彼が一人の人間のために命を捨てられたとしたら、あるいは神はその努力をお受けになるかも知れない。しかし、ただの一人の人間として彼はただ一人の人間のためにしか死ねないのである。全ての者は失われるのである。

「有限は有限の程度しか耐えられない。だから人間の性質は屈してしまう。しかし、キリストの性質は苦しみのためにもっと大きな容量があった。人性は神性に存在していたので、失われた世界の罪がもたらした苦しみを耐えるだけの容量を造り出したのである。」5BC p1103

ここで我々はキリストの性質について結論を引き出すことが出来る。

「キリストのうちに神性と人性、即ち創造者と被造物が結合された。神の性質、即ちその律法が犯された者とアダムの性質、即ち律法を犯した者がイエス即ち神の子と人の子の中において出会った。」
7BC p926

イエスのご自分について何と言われたか？

イエスのご自分について、「わたしは自分からは何事もすることができない」（ヨハネ5：30）と言われた。ここに彼はご自分の人性について言われたのである。もし神であるなら、どうしてこのようなことが言えよう？彼は神の力の全てを持っておられたし、望み通りのことをすることがお出来になったはずである。しかし、ここにわずかな者しか理解し、驚嘆しない秘訣がある。イエスは人間として全く天父に依存されたのである。彼は天父から独立して働き、生活されなかった。神として彼は望み通りのことをすることがお出来になったが、人間として「何事もするこ

とができな」かったのである。

「キリストはご自分がなされたすべてのことにおいて、天父と協力しておられた。キリストは、いつもご自分が独力で働かれるのではないということに注意深く明らかにされた。キリストが奇跡を行なわれたのは信仰と祈りによってであった。キリストは、すべての人がキリストと天父との関係を知るように望まれた。」各時代の希望中巻 p352

その意味するところは何かということイエスは人間で、100%人間であられたということである。彼は人間として生活され、服従された。人間として「何事もできな」かったのである。彼は天父に頼られ、信仰と祈りを通して力を受け、服従し、奇跡を行なわれたのである。他の人間と同じように、彼は天父の力が聖霊という形をとって彼のうちに働かなければ服従出来なかったのである。全ての人間と同じく天父との絶えざる接触を必要とされ、為すことは全て信仰と祈りによったのである。彼はいかなる問題に遭遇した時も、ご自分を助けるために奇跡を行なおうとして神性の力をお使いにならなかった。

荒野での誘惑を考えていただきたい。イエスは石をパンに変える誘惑を受けられた。彼はエサウのように飢えておられた。しかし、その飢えはエサウのそれとは比較出来ないほど強いものであった。エサウはレンズ豆のあつものために長子の特権を売ってしまった。しかし、イエスは固く立たれたのである。人間としてイエスは「あらゆる点で」試みを受けられたが、全てのテストにパスされたのである。飢えに委ねる誘惑は全ての者にやってくるが、石をパンにかえる誘惑を受ける者は決していないであろう。我々には出来ないのである。しかし、イエスはご自分の神としての力を使えば、それはたやすいことであった。もしそれをされたなら、彼の使命であったところの我々の模範となることは失敗に終わることを意味していた。彼は人間に提供されるのと違った方法で力を行使されるのであった。神の力は我々にも提供されるように彼に天父を通して与えられるのであった。イエスは全ての人間と同等の立場を変える誘惑に委ねなかった。全ての人と同じレベルに立たれたのである。天父のみこころではないことをするためにご自分の神としての力をお使いにならなかった。もし天父が石をパンに変えることを良しとされたなら、人間としてのイエスは、ご自分の使命に失敗する恐れもなく、その奇跡を行なうことがお出来になった。しかし、奇跡は天父のみ旨として天父への祈りによってなされるはずであった。そのような行動は、やもめの瓶に油が尽きないようにされたエリヤの行動と違いはなかったはずである。人間エリヤはそのようなことを行なうことが出来た。というのは、それが神のみ旨と一致していたからである。エリヤが天から火を降らしたのは、そうすることが神のみ旨であったから、神が奇跡を行なわれたのである。今日、同じ方法で、どんな奇跡をも、もしそれが神のみ旨と一致しているなら、行なうことが出来る。イエスは、その同じレベルで人間として全ての奇跡を行なわれたのであり、天父のみ旨に従い、天父の導きによってなされたのであった。イエスは地上においては預言者であられた。彼は全ての預言者が人間であったように、人間であられた。だから、イエスが「わたしは自分からは何事もすることができない」と言われたのは本当であった。

「キリストを通して、人類の叫びは限りなくあわれみ深い天父に達した。人としてキリストは、人性と神性とを結合する天来の電流によって、ご自分の人性が充電されるまで、神のみ座に嘆願された。世の人々にいのちを与えるために、イエスはたえまないまじわりを通して神からいのちを受けられた。イエスの経験がわれわれの経験となるのである。」各時代の希望中巻 p101

「救い主の神としての力は隠された。彼は人間として、神の力に頼って、勝利されたのである。こ

れが我々すべての者の特権である。」5BC p1108 マタイ27:50の注解

イエスの経験が我々の経験となるのである。彼は人間として、神の力に頼って勝利されたのである。これが我々すべての者の特権である。

端的にまとめて言えば、キリスト・イエスはご自分の神性の力は用いずに、人間として勝利された。全ての人間は同じ方法で生活し、勝利すべきである。イエスは、本当に我々の完全な模範であられた。

この偉大な原則を理解し始めると、どのように144,000 というグループが出来上がるかがわかり始める。しかし、このグループがいつ、どのように形成されるのかは、SDA内外においての大争闘の中心であった。このキリストの性質と人の性質の主題を正しく理解することは、この最後の世代の144,000 についての考えを形成するのに、大きな役割を果たすことになるであろう。

二つの意見

- (1) 現代SDA教会に、神の民は再臨の時まで起こらないということが強く強調されてきた。この結論はキリストの性質と人の性質について、この著者と違った見解を持つことに基づいている。
- (2) もう一つの考えは、生ける者のさばきが始まる前に、完全な状態に達することが出来るという考えである。この考えもまた、この重要な主題の異なった理解に基づいている。

原罪・キリストのとられた罪深い性質・人間の罪深い性質、またそれに関連した主題は続くアンカーで論じられるであろう。

エレン・ホワイトは144,000 について次のように言っておられる。

「そして、彼らは、み座の前で新しい歌をうたう。この歌は、144,000 以外の者は、だれも学ぶことができない。それは、モーセと小羊の歌、すなわち救いの歌である。144,000 のほかに、だれもその歌を学ぶことができない。なぜなら、それは彼らの体験——他のどの群れもしたことの無い体験——の歌だからである。『小羊の行く所へは、どこへでもついて行く』。彼らは、地上から、生きている者の間から、天に移された者たちで、『神と小羊とにささげられる初穂』とみなされる。(黙示録15:2, 3, 14:1~5) 『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって』、国が始まって以来かつてなかったほどの悩みの時を通過してきた。彼らは、ヤコブの悩みの時の苦しみに耐えた。彼らは、神の最後の刑罰がくだる中を、仲保者なしで立った。しかし彼らは、『その衣を小羊の血で洗い、それを白くした』ために、救われた」大争闘下巻 p430, 431

この叙述、また他のものを読まれて失望ぎみになるかも知れない。しかし、福音は良きおとずれであることを覚えていただきたい。サタンは我々の前に、それが悪いニュースであるようにするために、すでにオーバータイムで働いているのである。続けてこの誌を読まれるなら、この終末事件の良きおとずれを見るであろう。

デビッド・ミラー

信仰から学ぶ教訓 (LESSONS ON FAITH)

信仰とは、み言葉が言われることをそのまま成し遂げて下さると期待し、言われることを成し遂げて下さるのみ言葉により頼むことである。

このことが明確に認識される時、「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」と述べている聖句の意味を容易に理解することができる。

神の言葉には創造する力が吹き込まれているため、その言葉が言う事柄そのものを産み出すことができる。そして、信仰とは、み言葉が言われることをそのまま成し遂げて下さると期待し、言われることを成し遂げて下さる『み言葉だけ』により頼むことであるから、「望んでいる事がらを確信」することが信仰であるというのは十分明白である。

神の言葉自体に創造する力があるため、他の何ものによっても存在し得ない、または見られることのできないものを産み出し、出現させることができる。そして、信仰とは神の言葉が言われることを、そのまま成し遂げて下さると期待し、それを成し遂げて下さるのみ言葉だけにより頼むことであるから「まだ見ていない事実を確認すること」が信仰であるというのは十分明白である。

このような訳で、「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである」。

信仰を働かせる者は、神の言葉には創造する力があり、言った事柄を産み出すことができるのを知っている。したがってその人は、この世界が神の言葉によって産み出された、または存在するものとなったことを（憶測ではなく）理解することができるのである。

信仰を働かせる者は、神の言葉が語られる以前には、現在見えるものも、それらを構成しているものも現われなかったことを知っている。ただ単にそれらのものは存在していなかったのである。けれども、み言葉が語られた時、世界は存在した。ただ単にみ言葉自体がそれらのものを存在せしめたためである。

これが神の言葉と人間の言葉の違いである。人が語ってもその言葉の中には語られた事柄を成し遂げる力はない。自分で語った事柄を成し遂げるために、人は語った言葉に加えて何かをしなければならない。——人は自分の言葉を完成するために行なわなければならないのである。

神が語られる時、その事柄は存在している。そして、それはただ単に神が語られたために存在するのである。神の言葉は神が思いのままに語られた事柄を成し遂げられる。主は人間のように、語られた言葉に加えて何かをなさる必要がない。主はご自分の言葉を完成するために行なう必要がない。何故ならそのみ言葉がそれだけで完全なものだからである。主は「ただお言葉」を語られる。すると、その事柄は成し遂げられるのである。

このように書かれている。「これらのことを考えて、わたしたちがまた絶えず神に感謝しているのは、あなたがたがわたしたちの説いた神の言（ことば）を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく、神の言として——事実そのとおりであるが——受け入れてくれたことである。そして、この神の言は、信じるあなたがたのうちに働いているのである」（Iテサロニケ2：13）——信仰を働かせるあなたがたのうちに、である。

また「偽ることのあり得ない神」（ヘブル6：18）とあるのは、神が偽らないお方であるためのみならず、神は偽ることがおできにならないからなのである。それは不可能なことなのである。神が語られる時、語られた言葉の中に創造のエネルギーがあつて、「ただお言葉」がそれを成すようにするからである。

人が言葉を語っても、そこには何も無い。従って人は偽ることができる。ないものを語るのは偽りである。人は偽ることができる。ないものを語るることができる。何故なら、人の言葉自体には何も成す力

第一課 人の創造

生命の息

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。」
創世記2：7

人の創造には二つのステップがあった

1. まず始めに神は、肉体的、知的、また道徳的な可能性が備わったかたち structure（構造物）を形作られた。しかし、まだこの有機体（organism）には命がなかった。
2. それから神は、これ（有機体 organism）に息を吹き入れられた。彼が形作られたものに「命の息」を吹き入れられると、それは活動し始めた。「人は生きたものとなった」

体（肉体、知性、靈性）＋命の息＝生きた魂

神が人に与えられた生命の原則を明確に示すヘブル語の言葉が二つある。

1. Neshamah ネシャマ（通常は「息」と訳される）

「命の息」創世記2：7

「地の上に動くすべて肉なるものは、……すなわち鼻に命の息のあるすべてのもの……は死んだ。」創世記7：21, 22

「……全能者の息はわたしを生かす」ヨブ記33：4

「……鼻から息の出入りする人に……」イザヤ書2：22

「……あなたの息をその手ににぎり、……」ダニエル書5：23（英語欽定訳聖書）

2. Ruach ルーアク（通常「息」または「霊」と訳される）

「……命の息のある肉なるものを……」創世記6：17, 17：15, 22

「……すべての人の息は彼の手のうちにある」ヨブ記12：10

「……あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んで……」詩篇104：29

「……その息が出ていけば彼は土に帰る……」詩篇146：4

「彼ら（人と獣）はみな同様の息をもっている」伝道3：19

「Ruach ルーアク」は「霊」と訳される場合が多い。それは、ヨブ記27：3, 33：4、伝道の書3：21, 12：7などでは「息」という意味で使われているし、また詩篇51：17、列王紀上21：5では「心の状態」ととれるし、創世記1：2, 6：3では「聖霊」の意味で使われている。ただ文脈によってのみ「Ruach ルーアク」の適切な意味を見出すことができる。

新約聖書では、同じことを表わすのにギリシャ語の「Psyche パシケ」がヘブル語の「Ruach ルーアク」に相当する。

「命の息」はすべて肉なるものに共通している

今まで示された聖句から留意すべきことは、「Neshamah ネシャマ」「Ruach ルーアック」はすべて肉なるもの（人、鳥、獣、魚、地を這うもの）に神が与えられたということである。人間を決定的に特異にさせたのは、与えられた命の法則である「息」の質に違いがあったからではなく、それは人に組み込まれた可能性においてであった。

例えば、電流は、洗濯機、オーブン、ジュース等を働かせる。各々の機械の異なった働きを決めるのは電流の性質に違いがあるのではなく、それぞれの機械に組み込まれた可能性（機能）に違いがあるからである。

魂

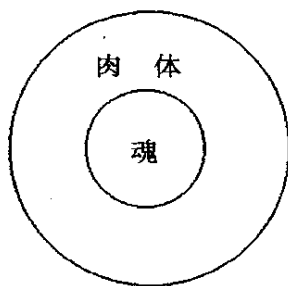
「人類の創造において、個性をそなえておられる神の力があらわされた。神がご自分の像に似せて人を造られたとき、そのかたちはすべての点において完全であったが、生命がなかった。そこで個性をそなえておられる自存の神が、そのかたちに生命の息を吹き入れた。そこで初めて人間は生ける、理性のある生物となった。人体のあらゆる部分が活動を開始し、心臓、動脈、静脈、舌、手足、感覚、頭脳、すべてが活動を始め、あらゆるものが法則のもとにおかれ、人間は生ける霊となった。神のみ言葉であるキリストを通じて、実在者である神が人間を創造し、知能をお授けになられたのである」MH p388

肉体＋命の息＝生きた魂

肉体－命の息＝No soul（魂がない）

ほとんどのキリスト教会が信じることに反して、神が肉体に魂を植えつけられたのではなく、「生命の息」を吹き入れることによって、人は生きた魂となったのである。

魂に対する一般的な理解は下図で表わしているような体の中に閉じ込められた別個に存在する無形の実存である。



この考えによると、肉体の状態は、タバコを吸おうが、酒を飲もうが、不健康な食べ物を食べようが、不節制な生活をして肉体を弱めようが、果ては死を招こうが、魂には何の影響も及ぼさないことになる。しかし、聖書には、全ての肉なるものは生きた魂であり、死ねば死んだ魂となると書いてある。

1. すべて肉なるものは魂をもつ（ヘブル語「Nephesh ネフェッシュ」ギリシヤ語「Psyche フシュケー」）

「水は生き物の群れで満ち……」創世記 1：20

それは字義通りには「生命の魂の群れで満ち」という意味である。

「命（魂）のある動く生き物（英語欽定訳聖書）」創世記1：20（30節も見よ）
「……その中の生き物（魂）がみな死んでしまった。」黙示録16：3

2. 魂は死ぬ

ヘブル語で「Nephesh ネフェッシュ」が主にこのように訳されている。

魂 ————— 428回
命 ————— 119回
人 ————— 28回
自己（身）——— 19回
死（体）——— 8回

興味深いことに、このような場合すべて、「Nephesh ネフェッシュ」は死に適用されている。

魂：「罪を犯した魂は必ず死ぬ。」エゼキエル書18：4

命：「わたしたちの命を救って、死を免れさせてください。」ヨシヤ記2：13

「あなたは自分の命……を失うようになるでしょう」士師記18：25

「彼はわたしの命を求めろ」サムエル記上20：1（英語欽定訳聖書）

「今わたしの命を取ってください。」列王紀上19：4

人：「すべて人を殺した者」民数記31：19

「人を殺した者」民数記35：11, 15, 30

「罪なき者を殺す者」申命記27：25

自己：「自分の死を求めて言った」列王紀上19：4

「死ぬことを願って言った」ヨナ書4：8

死（体）：「人の死体に触れて身を汚し……」民数記9：6, 7, 10

「死人のところに、はいつてはならない」レビ記21：11, 民数記6：6, 19：13

ハガイ書2：13

ギリシヤ語の「Psyche プシュケー」は

魂（58回）、命（40回）、知性（3回）、心（1回）と訳されている。

「Psyche プシュケー」は朽ちるべきものと宣言されている。

「また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。」マタイ10：28

「その中の生き物（魂 欽定訳聖書）がみな死んでしまった」黙示録16：3

「幼な子の命をねらっていた人々」マタイ2：20

「悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」マルコ3：4

「命を救うのと殺すのと……」ルカ6：9

「彼らはわたしのいのちをも求めています」ローマ11：3

「海の中の造られた生き物……は死に」黙示録8：9

「死にいたるまでもそのいのちを惜しまなかった。」黙示録12：11

ま と め

旧約、新約で「魂」という言葉の意味は「呼吸している被造物」のことを指している。
(Young's Analytical Concordance を参照) 「魂」という表現は、人・個人・命あるいは個人代名詞の彼・私・あなた等の慣用語として用いられている。

故に、「あなたの魂」は「あなた」であり、
「わたしの魂」は「わたし」
「彼の魂」は「彼」
「彼らの魂」は「彼ら」
「十人の魂」は「十人」を表わしているのである。

神が「あなたはきっと死ぬでしょう」と言われた時、それは意識のある生きた実在として存在することが止むことを意味していた。

実に聖書では「肉」あるいは「霊」また「魂」などの言葉も人を指す時に用いられることにも注意していただきたい。それは、我々がよく体の一部を使って、全存在を表わすのと同じである。例えば、「二十の頭は二十人を表わす」というように。イザヤが「すべての肉なる者は(英語欽定訳聖書) わが前に来て礼拝する」(イザヤ書66:23)と言った時、命のない肉体だけのことを指しているのではなかった。同じようにペテロやパウロが「霊」という言葉を使う時、それは肉体から分離したものとして用いているのではなかった。(ヘブル人への手紙12:23、ペテロ第一の手紙3:19)

完全な人間

完全に発達した組織と能力

「彼は完全な人間としての力をもっていて、心もからだも活力に満ちていた。」

各時代の希望上巻 p124

「彼は、完全な体力をもって神の前に立った。彼の肉体と能力は、完全な調和のうちに均一に発達していた。」1SM p267

「神は最初、人をまっすぐにお造りになった。人は完全な均整のとれた頭脳をもったものとして創造された。組織の大きさと力は完全に発達していた。アダムは完全な人間のタイプであった。すべての精神の特質は、よく調和していて、それぞれ独特な働きをもっているが、すべてが正しい働きをなすためには、お互いに依存し合わなければならなかった。」

R & H Jul. 27, 1886

人の組織の機能と能力は完全であった

人は、ただ単に地上の他のすべての被造物と同様に肉体の生命だけを経験するために「息の命」にあずかったのではなかった。聖霊の内住により、人は神性の個人的な生命にあずかるものとなったのである。人間は肉体的な生命ばかりでなく、霊的な命をもっていたのである。神の愛の霊で満たされて、人は神から与えられた能力のすべてを彼の創造者に栄光を帰すために用いたのであった。

1. 人は罪なき生活を送るために力を神から与えられた

「人は天との密接な交わりのうちに生き、全ての力の源から力を受けるのであった。神によって支えられ、罪なき生活を送るはずであった。」 R & H Feb. 11, 1902

2. 人は神性にあずかった

「神は、アダムを神の生命、性質にあずかる者としてお造りになった。」 1 B C p1082

3. 霊で満たされた宮としての人

「わたしたちは、神の作品であり、神の言葉は『人は恐るべく、くすしく造られた』（英語欽定訳聖書）と宣言している。……主御自身が聖霊を内住させるために、手掛けられたものである。」

（各時代の希望上巻 p186 を参照） H L p9

4. 悪への性向がなかった

最初のアダムには墮落した法則、悪への性癖はなかった。神の御座の前にアダムは欠点のない天使たちと同様であった。」 1 B C p1083

「神はアダムを清く、高尚な者として造られ、悪への傾向はなかった。」 1 B C p1084

「神は、人間を正しいものに造られた。神は、人間に悪の傾向のない気高い品性をお与えになった」
人類のあけぼの上巻 p25

5. 人は清く、光の衣をまとっていた

「彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった。

人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歓喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムより少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。罪のない彼らふたりは、手で造った衣服を身にまとっていなかった。彼らは、天使が着るような光と栄光の衣をまとっていた。彼らが神に従って生活するかぎり、この光の衣は、彼らをおおっていたのである。」 人類のあけぼの上巻 p20

6. 人は、その全ての熱情をもって神に応答した

「彼らは無限の知恵と知識とを告げている創造の秩序と調和を認め、エデンの園の美しさと栄光を絶えず、つぎつぎに新しく見出した。すると、心はますます深い愛に満たされ、唇からは、創造主に対する感謝と尊敬のことばが語られるのだった。」 生き残る人々 p34

「天使たちは、アダムとエバと一緒に、調和した音楽の聖なる調べをうたった。彼らの歌声が幸福なエデンからひびき渡って来ると、サタンは天父と御子にささげられる喜びに満ちた賛美の調べを耳にした。サタンはこれを聞いて、ねたみと憎しみと悪意をつのらせ、どうしてもアダムとエバに不服従の念をあおって、たちまち神の怒りを彼らの上にもたらし、彼らの賛美の歌を創造主に対する憎しみとのろいに変えてしまわなければならないと、部下の天使たちに語るのだった」 生き残る人々 p44

「彼らが神の律法に忠誠をつくしているかぎり、彼らの知って、理解を深め、愛する能力は、絶えず啓発されるのであった。彼らは、常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます、明瞭な観念をいだくようになるのであった。」 人類のあけぼの上巻 p27

7. 人は顔と顔をあわせて神と天使たちと交わった

「彼らは、天使たちの来訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された。」

人類のあけぼの上巻 p26

「創造主と顔をあわせて心と心の交わりをすることが、アダムの尊い特権であった。」教育 p4

8. 愛が人の全存在の土台であった (CT p32参照)

ディスカッション

「聖所の清め」と人の創造の当初の目的の関係を論ぜよ。ダニエル書8：14と黙示録14：7を見よ。

- ①「清められる」という広い意味
- ②「聖所」が回復される、擁護されるの意味
- ③神に栄光を帰すことの意味(黙示録14：7)

R. D. プリンズミード
知念 か お り 訳



レビ記に見る三天使の福音

これからレビ記の研究をしまりましょう。私共はレビ記に永遠の福音、三天使の使命を見ることが出来ます。神は最後の民を全く清められたレビの子孫と呼んでいます。マラキ書3章1節から4節までを主の僕エレン・G・ホワイトは大争闘下巻141、142ページに引用して、全く清められる民を「レビの子孫」としています。黙示録には神の戒めを守る女の残りの子らと表現されています。

レビ記というタイトルは、70人訳聖書学者らが原文ヘブル語からギリシャ語に訳する時につけたものだと言われています。原文ではほんとうは And he called (そして、彼は召された、選ばれた)となっていて、文頭からとられているそうです。ペテロ第一の手紙2章9節に「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である」とあります。これが、レビ記の言わんとしていることです。この「選ばれた種族、祭司の国、神につける民」とするために、神はどのような方法を用いられるのかということを見ることが出来ます。「それによって、暗闇から驚くべき光に招き入れて下さった方のみ業をあなたがたが語り伝えるためである」。私共が三天使の最終使命を全世界に宣べ伝えるためには、選ばれた種族、祭司の国として全く聖なる国民、神につける民とならなければならないのであります。エゼキエル書36章23節「わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる」。「あなたがたによって」……神が聖なること、主なる神であることを諸国民に知らせるためには、神の民を通してなさることです。

レビ記の理解のために

レビ記の理解のために私たちは次のことを考慮する必要があります。

まず第一に、神が人類に対して持つておられたご計画を理解することです。人間が造られた目的はイザヤ書43章に書いてあります。これは、又、レビ記と非常に密接な関係があります。「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる」と始まり、創造主を明記しています。「イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、『恐れるな、わたしはあなたをさがした。』」。3節「わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あなたの救主である」。レビ記に「わたしは聖なる者である」ということが幾度も繰り返されて、「あなたがたも、わたしが聖なる者であるように、聖なる者となりなさい」と言われています。7節「すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた」。人間が造られた目的はそこにあったのです。21節「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである」。人間が塵によって神の御像に造られた目的は、神の栄光を表わすため、神ご自身のためでありました。

各時代の希望第三巻 157ページに、「神の栄え、キリストの栄光は神の民の品性の完成に含まれている」とあります。この「聖」という言葉がレビ記に繰り返し出てまいります。87回出てくるとキャンベル博士は言っております。レビ記の中心思想は「わたしが聖であるように、あなたがたも聖なる者となりなさい」ということであります。

第二にヘブル人への手紙とレビ記を結びつけて研究することです。これらはちょうどダニエル書と黙示録のように、互いに説明し補足し合っています。

ヘブル人への手紙に「我々は完全に向かって進むのではないか」とあり、「完全」というのがキーワードとなっています。ですから、レビ記は旧約聖書のヘブル書と言ってもいいでしょう。そしてヘブル書は新約聖書のレビ記と言ってもいいでしょう。私たちは祭司として選ばれました。私たちは選ばれた

種族、又ヘブル人であります。アブラハムの信仰にあずかる者は皆、ヘブル人であり、聖なる者となるためにエジプトから導き出されたのであります。

けれども、救出された神の民は、そこでとどまるのではなく、今度はレビ記、すなわち聖なる祭司、聖なる者となるために、神がどのような方法をもってそれをなされるのかということを見なければなりません。福音は罪からの解放であります、ただ解放だけではなく、贖われ、高められ、そしてさらに私たちに栄誉を与えるというのです。ヘブル人への手紙も「完全な犠牲」「完全な大祭司」に対する信仰によって完全に向かって進むこと、み前に近づくことを教えています。私たちを通して神ご自身の栄光を表わすというのが聖書全体のテーマであり、聖所のテーマであり、そしてこのレビ記のテーマであります。

第三に、ダニエル書、黙示録のテーマをいつも念頭において研究する時によく分かるようになります。ダニエル書のテーマは一言で言うならば、回復であります。神の民を回復して聖所が清められ、そして王が回復され、王国が成り立つのであります。黙示録のテーマは、清められた人たちが、イエス・キリストを啓示するということです。キリストのご品性を啓示することなのであります。

レビ記の中心思想

目標 レビ記に私たちは①出エジプトをしたクリスチャンに神が持つておられる目標を見ることができます。それは神が聖であられるように聖となれということです。②誰がそうするのか——「わたしがあなたがたを聖別する」と強調されています。③手段は——キリストの血、火と水で象徴される聖霊によることを教えています。④いつ、それがなされるか——贖罪の日です。

レビ記のキーワード、鍵となる言葉は「ホーリネス」。聖、あるいは聖潔、清さであります。又「贖い」「ゆるし」という言葉がよく出てきます。「贖い」「ゆるし」「聖め」は同意語のように使われています。レビ記の中心思想の一つはレビ記11章44節に見ることができます。「わたしはあなたがたの神、主であるから、あなたがたはおのれを聖別し、聖なる者とならなければならない。わたしは聖なる者である」。45節下句「わたしは聖なる者であるから、あなたがたは聖なる者とならなければならない」。19章1節「あなたがたの神、主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」。何という命令でしょう。何という高い目標でしょう。そして、私たち罪人にとってはあまりにも恐ろしい神のご命令であります。

「わたしが聖であるように、あなたがたも聖なる者となれ」……。誰がそのようなことができるでしょうか？ 私たち罪人はエチオピア人がその皮膚を変えることができないように、豹がその斑点を変えることができないように（エレミヤ13：23）、自分の心を清くしたり、変えることはできないのであります。それからエレミヤ書2章22節「『たとえソーダをもって自ら洗い、また多くの灰汁を用いても、あなたの悪の汚れは、なおわたしの前にある』と主なる神は言われる」というのです。しかし、レビ記に素晴らしい福音があります。人にはできないことを神がなされるのです。

誰が聖別する？ レビ記に幾度も出てくる「わたしが、あなたがたを聖別する」という言葉、ここに福音があります。レビ記20章8節「わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたはわたしの定めを守って、これを行なわなければならない。わたしはあなたがたを聖別する主である」。「あなたがたを聖とする主、すなわち、わたしは聖なる者だからである」。「あなたがたを聖とする主」と紹介されています。それから21章23節下句「わたしはそれを聖別する主である」。22章9節下句「わたしは彼らを聖別する主である」。16節下句「わたしは彼らを聖別する主である」。そして、32節下句「わたしはあなたがたを聖別する主である」。

何故、このように繰り返し言われているのでしょうか？ 私たちは自らを清くすることはできない、人

にはできないことを神がして下さるということです。人の心を変えるのは神の業であります。出エジプト記でもそのことが言われておりました。わたしたちを神の住まい、聖所となさるために、神がわたしたちを聖別するということが出エジプト記31章13節にあります。これは、安息日と関係して言われています。「あなたはイスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである』」。ここで「わたしがあなたがたを聖別する主であることを知らせる」ことが、安息日の目的であると言われているのです。

ついでに、この聖句と関連して安息日と私たちを聖として下さる神の目的との関係を見てみましょう。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と出エジプト記20章の十戒の第四条に言われています。安息日を覚えることは、ただ七日目土曜日に教会に行くということではなく、安息日は神がわたしたちを聖別するお方であるということ、主であり、神であられるということをお教えるためのものです。そこで第四条の戒めで、ご自分を創造主として紹介しておられます。天と地と海と、その中の全てのものを造られた主なのです。この創造主のみが人を変え、人を清め、人を聖とすることがおできになるということをお教えることはよく覚えていなければなりません。わたしたちは神の恵みを得ようとして、自分で清くなろうとして何千年もがいても泥沼に落ちこむだけであります。いたずらな修養、修業で終わってしまうのです。

エゼキエル書20章12節に何と書かれているのでしょうか。「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」。

「安息日を覚えよ」ということは、安息日の主、我々を聖とする主、何でもおできになる創造主を覚えよということなのです。人間にとって一番忘れやすい事柄であります。ですから、少なくとも一週間に一回、主なる神が私たちが清める業をなさるということをお覚えなければならないのではないのでしょうか？

わたしたちは安息日、七日目の土曜日に教会に行っても、安息日の主を忘れることがあります。主がわたしたちをお清めになる、主がわたしたちを栄化して下さる、聖化して下さるということを忘れて、自分の業に頼り、「ああ、律法は難しい、安息日を守ることは難しい、神は難しい方だ」と、安息を得ない生活を続けることがあります。

パウロはピリピ人への手紙の1章5節に「あなたがたが最初の日から今日にいたるまで、福音にあずかっていることを感謝している」と言っています。……福音というのは、罪からわたしたちを解放することです。レビ記には血によって罪から解放することを教えています。黙示録1章5節に「血によってわたしたちを罪から解放し、……み国の民とし、祭司として下さ」と書いてあります。これが福音であります。

そして、ピリピ人への手紙1章6節「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」。ヘブル人への手紙12章2節に「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」と記されています。

ピリピ人への手紙2章13節「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」。わたしたちに悔い改めを与え、信仰を与え、告白させ、願いを起こさせ、そしてさらに良いものを求めさせ、さらに飢え渴きを与え、そして清くなりたい、完全になりたいとの願いを起こさせ、実現に至らせるのは神であるということです。わたしたちは主がして下さるこの業に安んじることを学ばなければなりません。

ヘブル人への手紙の中で安息日と信仰による義認に関してパウロはこう言っています。4章1節「それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ存続しているにかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか」。5節「『彼らをわたしの安息に、はいらせることはしない』とされている」。彼らイスラエルは不信仰だったからです。9節「こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。なぜなら、神の安息にはいった者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。したがって、わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない」。わたしたちは安息日毎に自分の業をやめて主に委ねるといふこの大事なレッスンを学ばなければならないと思います。レビ記には「主が言われた」「主が命じられた」という言葉が56回、「わたしはあなたがたの神、主である、エホバである」という言葉が21回出ているそうです。他のどの書にもこれほど多くこのような使われ方はされていないとされています。これはキャンベル・モーガンの観察です。「主なる神」がわたしたちをお清めになる故に、第一天使の使命の中で私たちが義とし清めて下さる方、私たちが造り変えて下さる方、創造主を畏れるように教えているのです。

人にはできないことを神は人のためにして下さるのです。至聖所におけるイエスは最後の民、レビの子孫、残りの民を傷がなく、そして口に偽りのない純潔な者として罪なき状態に造りかえて下さるといふその福音のふるまいに招いておられます。信仰によって至聖所に入るなら、後の雨が豊かに注がれてキリストに聖霊が満ちていたように、わたしたちも聖霊に満たされて、私たちのうちに神の道徳的な御像が完成され、世に出て行く時に神のみ業、福音の完結があるのです。私たちがそれを悟らずに、不信仰によって完全になることは不可能だと言う時に、神の安息に入り損なうのであります。昔のイスラエルの人々と同じように。

第一天使の使命「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」とはどういうことでしょうか？人間ができないことを神はして下さるといふことを認めて、受け入れることであります（ローマ4：17～21）。完全になる、聖なる者になる、このことは、処女マリアにいと高き神の子が宿ることと同じように不可能なことであります。天使がやって来て、「幸いなる女よ、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに生まれ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう」と言いました。この良き訪れをもってきた天使に対してマリアは「どうして、そんな事があり得ましようか。」と言って不信を表わしたのです。けれども、天使が「神には、なんでもできないことはありません。」と言った時に、マリアは素直に「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と言って、自分の栄光を塵に伏し、そして、神のなさる働きを受け入れた時に業が起こったのであります。

神の約束の言葉を信仰によって受け入れる時に、神の素晴らしいみ業が成るのです。これは信仰による義認です。信仰による義認というのは、人間の栄光を塵に伏させ、人ができないことを神が人のためになさる神の働きであるとホワイト夫人は言っておられます。

マリアに天使が言ったことは、「人にはできないが、神には何でもできないことはありません。神に栄光を帰せよ。神をおそれなさい」という第一天使の使命であったのです。「お言葉どおりこの身に成りますように」と私たちは答えるべきです。

さばきの時に もし、私たちがマリアのような信仰をもって、至聖所から提供されている祝福を受け入れるならば、わたしたちのうちに神のみ業が完成されるのです。レビ記はそれを教えようとしているはずですが、ですから第一天使は「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来た」と大声で叫んでいるのです。さばきの時、贖いの日は神の恵みの業が完成する時でもあります。そこで第一天使の使命は「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」と創造主を紹介しているの

あります。「わたしが主なる神である。わたしが聖別する」というのです。

手段 では神はどんな手段、方法によって私たちを清めるのでしょうか？罪と不義を清める手段として、レビ記は犠牲の血を紹介しています。何故、あれだけの血が流されなければならなかったのでしょうか。うるさいくらい、レビ記には血、血、血が出てきます。血を流すことなしには罪のゆるしが得られないのです。一般キリスト教会は十字架でキリストの血潮が流され、贖いは完成したと言います。しかし、レビ記では最後の贖罪の日に特別な贖い、特別な清めがなされることを教えています。

大争闘下巻 134ページ、「贖罪に関する重要な真理が、型としての儀式によって教えられている。罪人の代わりに、その身代わりとなるものが受け入れられた。しかし、犠牲の血によって罪が取り消されたわけではなかった。こうした方法によって、罪が聖所に移されたのであった。罪人は、血のささげ物によって、律法の権威を認め、犯した罪を告白し、来たるべき贖い主を信じる信仰によって許しを願っていることを表明した。しかし彼は、律法の宣告から全く解放されたのではなかった」。

そうです。全く解放されたものではありません。罪のゆるしも条件つきでありました。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」のであって、絶えずキリストの香に、血に、功しに頼っているならば、そして、さばきの日にも、最後の贖いの日にも悔い改めと信仰をもってキリストの功しに依存する人たちだけが、永久に罪がゆるされ、罪が除去されるのです。それまでは罪が聖所に移されたままでした。

日毎の奉仕における贖い、ゆるしというのは何でしょうか？清めというのは何でしょうか？ヘブル書、レビ記の4章、5章にも言われているように、戒めに反して罪を犯し、それを知った時、とがを得るとい言葉が幾度も繰り返されています。「知った時、とがを得る」、罪を意識した時、良心の咎めを感じた時、犠牲をもって来て告白するのです。つまり私たちはイエスに「ゆるして下さい」と告白します。悔い改めます。その時、主は喜んで私たちの罪をゆるし、清めて下さるのです。その場合の清めというのは、良心の咎めをなくするものです。罪意識から解放して下さい。良心はすすがれて、洗われるのです、しかし、罪の記録は残っています。もし私たちが途中で主を仰ぐことを忘れ、最後までキリストの血に頼ることを忘れるならば、告白した罪が再び罪人に戻ってきて良心を苦しめるのです。しかし、最後までキリストの血に依存している人たちは日毎に良心が洗われ、すすがれて、信仰の確信に満たされつつ、至聖所の祝福に近づくのです。

ヘブル人への手紙10章19節「兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいつて行くことができるのであり、さらに神の家を治める大いなる祭司があるのだから、心はすすがれて良心のとがめを去り」と書いてあります。

又、パウロは使徒行伝23章1節に「兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心に従って行動してきた」と言っています。わたしたちが聖霊によって示される一つ一つの罪を素直に認めて告白するや否や、神は良心を洗って下さるのであります。何というありがたいことでしょうか。24章16節「わたしはまた、神に対した人に対して、良心に責められることのないように、常に努めています」。これが日毎の奉仕からくる祝福であります。

だから平和が来るのです。人知では計り知ることのできない平安、喜びが義認の結果として与えられるのです。ですから、悪魔がやって来て、私たちの許されたはずの罪を指摘して、失望させようとする時、私たちは信仰によってイエスの功しを仰ぎ、イエスの血のみを主張して、こう答えるのです。ローマ人への手紙8章31節「それでは、これらの事について、なんと申すか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか。だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だれが、わたしたちを罪

に定めるのか。キリスト・イエスは死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなしてくださるのである」。キリストの血がとりなすのです。キリストは今も至聖所において、「わが血、わが血、わが父よ、わが血」ととりなしをしておられるということをほんとうに私たちは感謝しなければならないと思うのです。

そこで、贖罪の日、これはさばきの日でもあります、イスラエルの民にとってこれは一年中で最も厳粛で大事な祭でありました。この日にあなたがたを清め、あなたがたを贖うというのは何故、それが必要なのでしょうか？それは罪の記録があったからです。またなおも罪の泉、罪の根本が残っているからです。

教会の証5巻 472ページから読むと、大祭司ヨシュアを訴えるサタンが、犯した全ての罪を思い起こさせようとして、汚れた衣、すなわち品性を指して、「救われるに価しない」と訴え責めるその時、イエスは、ただひたすら悔い改めと信仰をもってキリスト・イエスに依存する神の民を代表する大祭司ヨシュアを見て、「汚れた衣をぬがせなさい。そして、新しい祭服を着せなさい」と言明されます。その汚れた衣というのは罪の記録であります。品性の汚れであります。罪を告白してゆるさされてはいても、なお残っている罪の記録であります。それが贖罪の日に清められるのです。

大争闘下巻 142ページに、キリストは特別な最後の贖いをするために聖所から至聖所に入られたことが明らかにされています。そして、このことはダニエル書8章14節の聖所の清めと、それからダニエル書7章13節のさばきと、マラキ書3章の「主がその宮に来られてレビの子孫を清める」というあのできごとと、マタイによる福音書25章の十人のおとめの中で語られた婚姻の席への花婿の到着ということは同じ事件を表わしていると同じページに言われています。

そこで、マラキ書に何が書いてあるのかを見てみましょう。「あなたがたの求める所の主は、たちまちその宮に来る」というのはイエスのことです。「見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる」……新しい契約を最後の民のうちに成就して、聖所を清め、回復し、永久に彼らを神の宮として完成させるのです。しかし、その贖いの前に調査審判があります。そのことを2節に描いています。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」。確かにさばきは厳粛であります。知らないで犯した罪、知って犯した罪、隠れて犯した罪、そして、チャンスがあれば犯すであろう全ての罪が明らかにされ、神の光の前でさばかれるのです。「だれが立ち得よう」と言われるのです。「彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである」。

しかし、この恐ろしい厳粛なさばきの時に、キリスト、我らの大祭司がただ求められることは、何でしょう？これは悔い改めと信仰です。「イエスが、彼の恵みに浴する人々のために嘆願される一方において、サタンは、彼らを罪人として神の前に告訴する。大欺瞞者サタンは、彼らに疑惑を抱かせ、神に対する信頼を失わせ、神の愛から彼らを引き離し、神の律法を犯させようとしてきた。そして今度は、サタンは、彼らの生涯の記録を指摘し、品性の欠陥、贖い主のみ栄えを汚したところの、キリストに似ていない点、そして、彼が誘惑して彼らに犯させたすべての罪を指摘して、これらのことのゆえに彼らは自分の臣下であると主張する」（大争闘下巻 p216～217）その時、印が押される直前、聖霊が下る直前、少数の忠実な隠れた民は至聖所のイエスを仰ぎ、魂を悩ますのです。心を探索して、魂の純潔を求めます。平和だ、無事だという欺瞞に惑わされることはないのです。彼らは心貧しく、悲しみ、飢え渴き、謙遜にイエスを求めます。

そして、イエスは彼らの罪の弁解はなさいません。初代文集の「ふるい」の章を見ると、この神の印を受け聖霊を受けるグループが身を悩まして大粒の汗をしたたらせ、苦悩する者たちとして描かれています。彼らはサタンに罪を指摘されるのです。「イエスは彼らの罪を弁解なさらないが、彼らの悔い改めと信仰を示して、彼らの許しを主張なさ」るのです。そして汚れた衣をぬがせ、新しい祭服を着せ、

しみもしわもそのたぐいのものがいっさいない栄光の姿の教会に変えられるのです。

大争闘下巻の 136 ページに「しかし、これを完成するためには、だれが罪の悔い改めとキリストを信じる信仰によって、贖いの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の書の調査がなされねばならない」と書いてあります。

贖いの恵みを受ける資格、これは悔い改めと信仰であります。またマラキ書に戻りますが、3 章 3 節「彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」のです。そうです。裁かれて清められる、すなわち贖われるのです。そして大争闘を見ると、その時、永久に罪のゆるし、すなわち罪が除去されるという言葉も使っています。さばきの時において永久にゆるされる。あるいは言葉を変えて言うならば、永久に義認されるのです。大争闘下巻の 216 ページを見ると、キリストが神の御座で最後の嘆願をなさる時に、勝利した者のためにその罪を永久にゆるし、「ご自分の民のために、完全で十分な許しと義認」を嘆願なさり、「ご自分の民がご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められる」というのです。

至聖所において、永久に完全に罪がゆるされ、永久に完全に清められ、そして永久に完全に服従する経験が提供されています。これが 1888 年に提供されたメッセージでありました。そしてこれは、ルーテルやウェスレーのメッセージ以上のものでありました。原則はアブラハムの福音、パウロの福音、ルーテル、ウェスレーの福音と同じでありました。しかし、背景は違っていました。背景は至聖所です。祝福が違うのです。それは罪の永久のゆるし、罪の永久の除去、そして、後の雨、神の印、完全な品性です。その点において異なっていたのです。この点において 1888 年のメッセージはアドベンチストにとってユニークなメッセージと言えるものでありました。

マラキ書 3 章 3 節「彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」のです。日毎の清めの経験をして、まだ完全にされていない私たちは、神のみ前に祈りと賛美と礼拝をささげる時に汚れた器を通してささげられるので、キリストのとりなしが必要なのです。そのままでは天父のもとに届かないのです。けれどもキリストの仲保が止む時、キリストがレビの子孫を全く清められた時、彼らは義をもってささげ物を主にささげるのです。アダムが罪を犯す前に、仲保者なくして祈りと賛美と礼拝をささげたように、その時、ユダとエルサレムとのささげ物（つまり、礼拝や賛美や祈り）は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれるものとなるということです。さばきの時に人間の栄光が塵に伏され、創造主によって永久に義認されるのです（第一天使）。永久にバビロンの汚れから清められるのです（第二天使）。永久に神の戒めに完全に服従するのです（第三天使）。

このようにして、私たちはレビ記に永遠の福音を見ることができるようです。レビの子孫は全く清められるのです。女の残りの子らは「純潔な者」と言われています。最後の神の民は全く清められて神の栄光にあずかるのです。ペテロ第一の手紙 2 章 9 節をもう一度読んでみましょう。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」。……その時、私たちは大いなる叫びをもって神の栄光を、イエスの御像を反映して、第三天使の使命を全世界に伝えるのです。聖別された民を通して神のみ業は終わるのです。そうでない限り、神のみ名は汚され、聖所は汚されて、み業は終わらないのです。

エゼキエル書 3 章 15 節から読みましょう。「わたしは重ねて諸国民のはずかしめをあなたに聞かせない。あなたは重ねて、もろもろの民のはずかしめを受けることはなく、あなたの民を重ねてつまづかせることはない、主なる神は言われる」。20 節「彼らが行くところの国々へ行ったとき、わ

が聖なる名を汚した」。21節「しかしわたしはイスラエルの家が、その行くところの諸国民の中で汚したわが聖なる名を惜しんだ」。22節「それゆえ、あなたはイスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、イスラエルの家よ、わたしがすることはあなたがたのためではない。それはあなたがたが行った諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためである」。23節「わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる」。ポイントをつかみましたか？「わたしがあなたがたによって、わたしの聖なることを示す」その時、諸国民は「わたしが主であることを悟る」というのです。これが伝道ではないでしょうか。

39章6節「わたしはゴグと、海沿いの国々に安らかに住む者に対して火を送り、彼らにわたしが主であることを悟らせる」。7節「わたしはわが聖なる名を、わが民イスラエルのうちに知らせ、重ねてわが聖なる名を汚させない。諸国民はわたしが主、イスラエルの聖者であることを悟る」。21節「わたしはわが栄光を諸国民に示す」。「あなたがたによって、わが聖なることを示す、わたしが主であることを示す」と言われるのです。

27節「わたしが彼らを諸国民の中から帰らせ、その敵の国から呼び集め、彼らによって、わたしの聖なることを、多くの国民の前に示す」。そうです！わたしたちを通して神のみ名が擁護されること、これが再臨運動の起こされた目的であります。神のみ名は神のご品性であり、神のご品性は神の律法に記されています。神の律法を擁護すること、これが再臨運動の目的であります。

37章23節「彼らはまた、その偶像と、その憎むべきことどもと、もろもろのものがともって、身を汚すことはない。わたしは彼らを、その犯したすべての背信から救い出して、これを清める。そして彼らはわが民となり、わたしは彼らの神となる」。26節「わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。これは彼らの永遠の契約となる。わたしは彼らを祝福し、彼らをふやし、わが聖所を永遠に彼らの中に置く。わがすみかは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわが民となる。そして、わが聖所が永遠に、彼らのうちにあるようになるとき、諸国民は主なるわたしが、イスラエルを聖別する者であることを悟る」。これが伝道です。

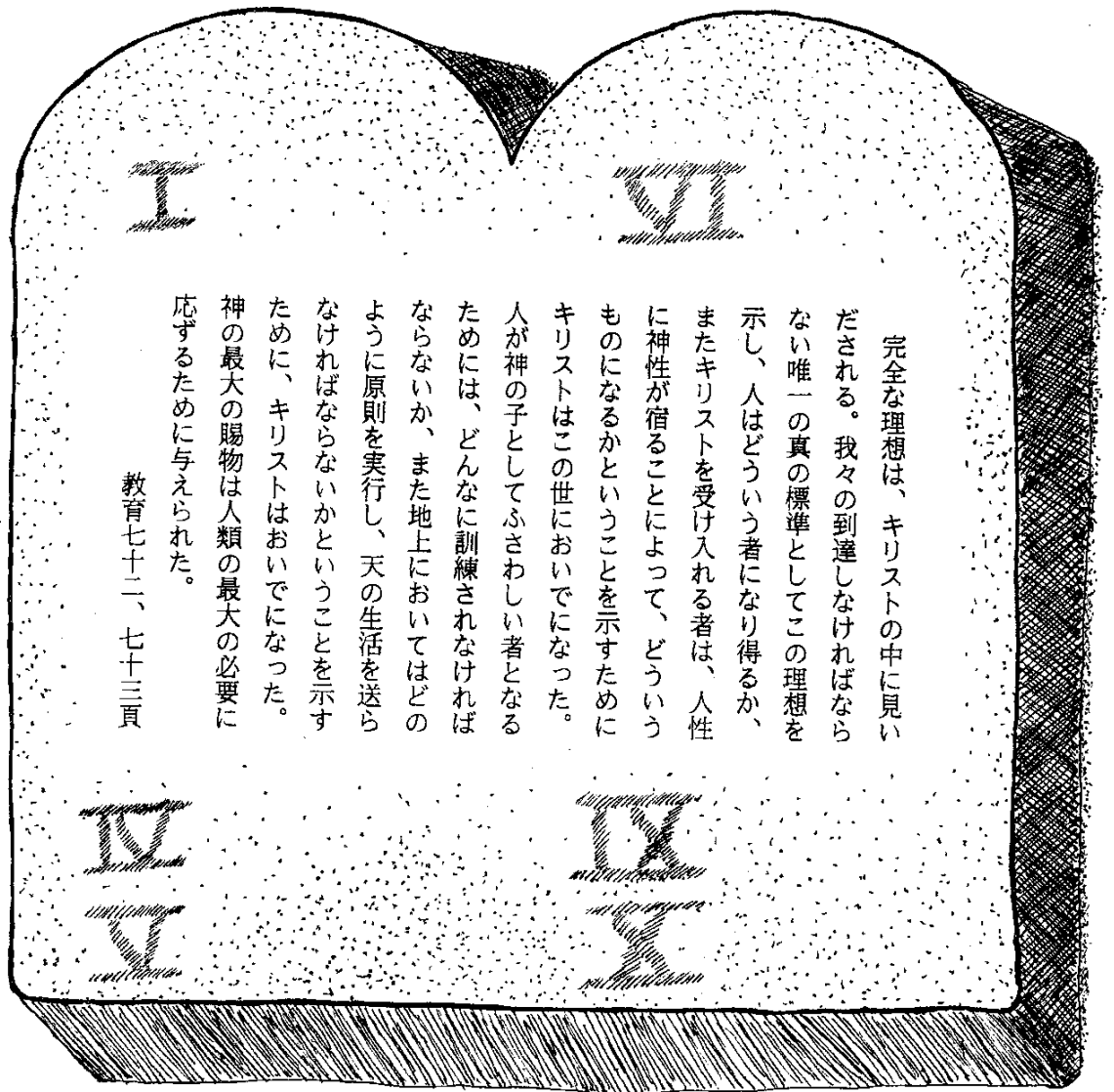
レビ記26章11節に同じことが書いてあります。「わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て、心にあなたがたを忌みきらわないであろう」。「幕屋をあなたがたのうちに建て……わたしはあなたがたのうちに歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう」。これが聖所の造られた目的であり、人間が造られた目的であり、レビ記のメッセージであります。私は、このレビ記の中に素晴らしい現代の真理、永遠の福音を見て心が踊ります。今こそ約束が果たされる贖罪の日、さばきの時です。日は延び、キリストは今なお十字架の苦しみを忍びつつ、待っておられるのです。

イザヤ書62章1節「シオンの義が朝日の輝きのようにあらわれいで、エルサレムの救が燃えるたいまつになるまで、わたしはシオンのために黙せず、エルサレムのために休まない。もろもろの国はあなたの義を見、もろもろの王は皆あなたの栄えを見る。そして、あなたは主の口が定められる新しい名をもってとなえられる」。イザヤ書52章1節、「シオンよ、さめよ、さめよ、力を着よ。聖なる都エルサレムよ、美しい衣を着よ」と訴えられているのです。イザヤ書40章5節「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである」。9節「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、（大いなる叫びであります。）声をあげて恐れるな。（神以外の何者をもおそれないのであります。）ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と」。

レビ記をまとめてみますと、レビ記のメッセージは第一に「わたしが聖であるようにあなたがたも聖

なる者となりなさい」という神の目標、ご命令であります。第二に、聖なる神、創造主なる神があなたがたを聖別するということであります。第三に清めの方法、手段はキリストの血によるのであります。火や水で表わされる聖霊が清めの働きをしますのです。第四に贖罪の日、さばきの日において完全に清めが成就するのです。そしてついに永久に罪が除去され、ゆるされた神の民はレビの子孫と呼ばれ、昔の日のように、先の年のようにささげ物を仲保者なしに神にささげ、喜ばれ、受け入れられるようになるのであります。そして黙示録に「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る」「女の残りの子ら」と描写されているのであります。144,000 がそれであります。

金城重博



■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ イエスの品性の美しさを仰ぎ見る ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

1. 最高の美しさは何か？

美しいものを愛し、美しいものを望むことは正しい。しかし神は我々がまず第一に最高の美すなわち滅びることのない美を愛し、これを求めるようにお望みになっている。人の手に成るどんなにすぐれた作品にも、神の御目に「大いなる価」を持つ美しい品性と比較し得るほどの美しさはない。

教育 p294

2. 義とは何か？

①義とは善きことであり、善きわざをなすことである。MS p68, 1894

②義とは律法に服従することである。1 SM p367

③義は聖であり、神に似ることである。そして「神は愛である」（Iヨハネ4：16）。義は神の律法に従うことである。なぜなら「あなたのすべての戒めは正し」（詩篇119：172）く、「愛は律法を完成するものである」（ローマ13：10）からである。義は愛であり、そして愛は神の光であり、命である。神の義はキリストの中に具体化した。（祝福の山 p22）

④義とは正しい行いである。（キリストの実物教訓 p292）

⑤律法を行なう者は義とされる。（ローマ2：13）

3. 人間の中にその義を持つ者がいるか？

義人はいない、ひとりもない……善を行なうものはいない、ひとりもない。……律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。（ローマ3：10～20）

4. 完全な品性を表現したのは誰か？

神の律法はご自身の品性の写しであり、……キリストの地上生活は神の律法の完全な表現であった。
キリストの実物教訓 p294

5. キリストはご自分を信じる者をどうなさるか？

主はわれわれを塵（ちり）の中から起し、汚れた品性をご自分のきよい品性に「型」どってつくり直し、ご自身の栄光をもってそれを美しいものとするためにおいでになった。（各時代の希望p28）

6. キリストをまねるにはどうすればよいか？

聖書は、キリストについてあかしをするものであるから、生徒はそれを研究することによって聖なる「型」を綿密に観察することができる。「型」をまねるには、それをしばしば、かつ綿密に観察しなければならない。

贖い主の一生を研究する時、

①人は自分の性格に欠点を発見する。自分があまりにもキリストに似ていないので

②自分の生涯になにか大きな変化がこなければ、キリストに従うものとなれないことがわかる。

③その偉大な模範に似るものとなりたいたいと願いながら、なお研究を続けていく時に愛する主のご様子やその精神をつかむようになり、「信仰の導き手、またこれを全うする者なるイエスを仰ぎ見る」すなわち、ながめることによって変化するのである。(安息日学校への勧告 p13,14)

〈参考〉

- ①'自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しくすぐれた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠。(キリストへの道 p81) ポケット版 p86
- ②'自分とキリストの間の距離が遠ければ遠いほど、また、神の品性と要求に対する見解が不十分であればあるほど、人間は、自分自身の目に正しく思われる。(大争闘下巻 p202)

7. 人が変化する法則は何か？

「信仰の導き手、また、これを全うする者なるイエスを仰ぎ見る」。すなわち、ながめることによって変化するのである。(安息日学校への勧告 p14)

8. 自分の真の姿を知る方法は何か？

ほんとうに自分を知る方法は、ただ一つしかない。それはキリストをながめることである。
(キリストの実物教訓 p138,139)

9. 青年たちは「型」であられるキリストを研究しないためにどんな状態と言われているか？

わたしはその「型」があまりにも研究されておらず、ほとんど高められていないのを見た。青年たちは自分たちの宗教のために苦しむこと、自己を否定することをほとんどしない。犠牲などということとはほとんど考えられていない。……(1 T p155)

10. キリストの一生は我々に何を教えているか？

A) イエスの一生は、われわれもまた神の律法に従うことができることを証明している。キリストはご自分の人性によって人類に接し、ご自分の神性によって神のみ座をとらえておられた。

①人の子としてイエスは服従の模範を我々に示された。

⇒ 型は何？

②神のみ子としてイエスは服従する力を我々に与えて下さる。

⇒ どのように？

(各時代の希望第一巻 p9)

B) ①神は何かおできになるかではなく、……

②神の力を信じることによって人間はどんなことができるかを示すためにおいでになったのである。
(OCH p 48)

11. キリストを仰ぎ見るということは何を意味するのか？

キリストを仰ぎ見るということは、みことばに与えられた主のご生涯を研究することを意味してい

1888年のメッセージとは何か（その1）

1888年のメッセージは一体何であったのか？それを理解するために第三天使の使命が生まれた1844年の頃からそれまでの事を背景として考えてみたい。初代教会はキリストが天に昇天され、聖所の第一の部屋で仲保の働きを開始された時、そこから提供される祝福（利益）を自分のものとするために信仰によってそこに入った。そこから与えられた力によって彼らは勝利から勝利のうちに世界を制覇していった。同じようにわが教会も聖所の第二の部屋、至聖所に信仰によって入っていき、1844年にその仲保の働きによる祝福（利益）（完全な品性の印）を受けて、力と栄光のうちに第三天使の大いなる叫びで全地を照らすことが神のみこころであった。

1844年に神の民は、天の至聖所に信仰によって入った。しかし、そこでなされるキリストの仲保によって提供される祝福、力を受け損じた。イスラエルは不信のゆえにラオデキヤに陥ったのである。

「むかしのイスラエルの歴史は、再臨信徒の団体の過去の経験の顕著な実例である。神は、イスラエルの人々をエジプトから導き出されたように、ご自分の民を再臨運動において導かれた。大失望のときに彼らの信仰は、ヘブル人が紅海で試みられたような試練を受けた。もしも彼らが、過去の経験において彼らとともにあった神の導きの手に尚も信頼していたならば、彼らは神の救いを見たことであろう。もしも、1844年の運動に一致して働いた者がみな、第三天使の使命を受け入れ、聖霊の力によってそれを宣布していたならば、主は彼らの努力とともに力強く働かれたことであろう。輝かしい光が、洪水のように世界を覆ったことであろう。何年も前に、地の住民に警告は発せられ、最後の働きが完結して、キリストはご自分の民を救うためにおいでになっていたであろう。

イスラエル人が荒野を40年もさまようことは、神のみこころではなかった。神は、彼らをまっすぐにカナンの地に導いて、彼らをそこで、聖く幸福な国民として定住させようとしておられた。しかし、『彼らが入ることのできなかつたのは、不信仰のゆえで』あった（ヘブル3：19）。墮落と背信のために彼らは荒野で滅び、他の者たちが約束の国に入るために起こされた。同じように、キリストの再臨がこのように遅れ、神の民がこのように長く罪と悲しみのこの世にとどまることは、神のみこころではなかった。しかし、不信が、彼らを神から引き離した。彼らが神に命じられた働きをすることを拒んだときに、使命を宣言するために他の者たちが起こされた。イエスは、世界をあわれんで、彼の再臨を延ばしておられる。それは、罪人に警告を聞く機会を与え、神の怒りが注がれる前に、主のうちに避難させるためである。」（大争闘下巻p182～183）

上述の引用文の要点をとらえよう。

1. 神の教会は1844年からしばらくして神の働きを終えて、天のカナンに入るはずであった。
2. 彼らは昔のイスラエルが荒野をさまよったと同じように荒野にさまよった。
3. 昔のイスラエルが荒野に残されたのは不信仰のゆえであった。アドベンチストに神の奥義が成就されなかつたのも不信仰のゆえであった。

再臨教団は主が彼らのために何を計画しておられたか悟ることができなかつた。有名なアドベンチストの世紀の説教者はこのことを次のように述べている。

「キリストの再臨がこのように遅れるのは神のみこころでなかつた。そして神の民がこの罪と悲しみの世界にこんなに長く残るのは神のみこころではなかつた。ああ、その責任は我々にあるのではないだろうか？我々にどんな罪があるのだろうか？それは不信である。不信を起こしたイスラエルの心に何が

あったのであろうか？エジプト、エジプト、エジプトである。彼らを神から引き離したのはエジプトであった。霊的にエジプトは世、この世、偶像礼拝、暗黒、すなわち不信である。不信という言葉（不信という言葉が全てを表わしている。）、このエジプトという言葉は、暗黒のシンボルである。」（A・T・ジョーンズの「霊的エジプト」という研究）

再臨信徒は至聖所におけるキリストの奉仕によって、神が遂に彼らの中に咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、義をもたらすことを信じなかつたために、彼らは第三天使の大いなる叫びをもたらす聖霊の注ぎ、充滿を受けることができなかつた。（GCB Mar. 5, 1897）

神の民の内に福音の働き、み業が完成して始めて世界の伝道は完成するのであるが、再臨信徒は神の奥義が彼らの内に成就されなかつたために世界伝道を完成することはできなかつた。ヒラデルヒヤ状態にある教会は1844年に至聖所に入り始めたけれども、黙示録3：12にあるイエスの約束、即ちわが神の名前を彼の内に、又、わが神の都の名前とわたしの新しい名前とを書きつけようという約束をつかむことができなかつた。聖所の清めの奉仕に対する信仰によって神の印を受ける代わりにラオデキヤ状態に陥ってしまった。

「最近、わたしは、柔和で謙遜なイエスに従うへりくだった人々をみつけようと回りを見渡して、考えさせられた。キリストが速やかに来られることを待望していると公言する多くの人々は、この世と妥協し、神に喜ばれることよりは、回りの人々の賞賛を得ようと熱心に求めている。彼らは、ほんの少し前に離れてきた名目的諸教会のように、冷たく形式的である。ラオデキヤ教会にあてられた言葉が、彼らの現状を完全に描写している（黙示録3：14～20参照）。彼らは「熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるい」。そして、もし彼らが「忠実な、まことの証人」の言葉に聞き従い、熱心に悔い改めて、「火で精錬された金」、「白い衣」、「目薬」を買わないならば、彼は彼らを口から吐き出されるのである。」（初代文集p 205, 206）

1852年から引き続き、主の僕は黙示録14章の第三天使の使命に打ち立てられた再臨教団にラオデキヤのメッセージを益々強くあてはめている。イスラエルの信仰が聖所にキリストと共に入っていないという事は、どういうことを意味するのであろうか？1890年に主の僕は次のような言葉を書かれた。

「眠りつつある教会は、霊的な昏睡状態から目覚めて、彼らが成し得なかつた義務を自覚するように覚醒されなければならない。わが民は、イエスがご自分の子らのために贖いをなさるために入っていた聖所に入っていない。」（R&H Feb. 25, 1890）

これらのことは誤解される余地を与えることができないほど明確である。「民は聖所の中に入らなかつた」。ここで言われている聖所というのは至聖所のことである。これがラオデキヤ状態の根源である。ラオデキヤの危機は、自己欺瞞である。教会はキリストが言明なさを認めない。キリストは教会が主張することをお認めにならない。ラオデキヤという言葉の意味は、民の裁きという意味である。ラオデキヤは至聖所に入っていない。それでいて、彼女のわざを誇っている。教会は、三天使の使命について知っているのではないだろうか？教会の学者たちは、2,300日の預言の動かすことのできない証拠を十分に持っているのではないだろうか？教会の印刷物は、世に安息日の真理を宣伝していないだろうか？教会は1844年に至聖所にキリストが入ったことを知っていないだろうか？こういうことは、ラオデキヤは百も承知である。このような素晴らしい霊的な真理の遺産を持っていて、いったい何が足りないだろうか？ラオデキヤは言う。教会は、このメッセージの形は知っている。しかし、そのダイナミック

さを経験していない。教会は教理の骨格は持っている。しかし、神髄を知らない。もし教会が大いなる贖いの日における大祭司の輝かしい働きを一瞥するならば、キリストが彼女の汚い衣を脱がせ、そしてキリストの生涯の罪なき完全を与えようとしておられるのを見るであろう。もし目薬があるならば、ご自分の教会を印して、ご自分の完全な品性を与えようとして切に待っておられる彼の姿を見るであろう。現代のイスラエルは、黙示録14章の永遠の福音の神髄を見ていない。彼らは第二の部屋のキリストの仲保における祝福から来る大いなる経験を得るために信仰によって入っていない。かえって、昔の宗教改革者の第一の部屋、聖所における経験以上に福音の考え方に進歩していないのではないか。

1888年のメッセージ

神は1888年にご自分の器たちを通して覚醒メッセージによってラオデキヤ状態を正すために働かれた。それは黙示録14章の神髄であるところの信仰による義に教会を目覚めさせるためのメッセージであった。神は、若い二人の働き人、すなわちE・J・ワゴナー長老、A・T・ジョーンズの二人を立てて、永遠の福音、聖霊によるデモンストレーションと力によってラオデキヤの霊的な病を癒そうとされたのである。彼らの働きは預言の霊によって保証付きであった。1888年に引き続いて数年の間、エレン・ホワイトはたえず彼らは主のメッセンジャーであったという特別な言及をされた。

「主は大いなる憐れみのうちにワゴナー及びジョーンズを通して、ご自分の民に最も尊い使命を与えられた。その使命は、上げられた救い主、全世界の罪のための犠牲をさらに顕著に世界に示すものであった。それは、保証人であられるキリストを信じる信仰を通して与えられる義認を提示した。それは神の全ての律法への服従に表わされるキリストの義を受け入れるように民を招くものであった。多くの者は、イエスを見失ってしまった。彼らの目は、神としてのお方、功績、人類家族に対する不変の愛に向けられるべきであった。全ての力は彼の御手に与えられ、そして彼はその尊い賜物を人に分け与え、無力な人間の器にご自分の義の比類なき、尊い賜物を与えられるはずであった。これが神が世界に与えるようにお命じになったメッセージである。それは大いなる叫びで、大量の御霊の注ぎを伴って宣伝されるところの第三天使の使命である。」（牧師への勧告 p91, 92）

「何年もの間、教会は人間を見てきた。そして、人間から多くのものを期待してきた。我々の永遠の生命の希望が集中されるお方、イエスを見上げる代わりに。それ故に、神はご自分の僕にイエスにある真理を啓示する証を与え、第三天使の使命を明確に啓示された。」（牧師への勧告 p93）

「……第三天使の大いなる叫びが罪を許す贖い主キリストの義の啓示のうちにすでに始まった。これは全地を栄光で満たす天使の光の始まりである。」（セレクトッド・メッセージ第一巻 p363）

「幾人かの人々が、信仰による義認のメッセージは、第三天使のメッセージであるかどうかについて問い合わせてきたので、わたしは答えた、『それは、第三天使の使命そのものである』と。」

（R&H Apr.1, 1890）

上述した引用文は、1888年の意味するところが何であるかということを我々に理解させてくれる。この信仰による義の説教は、我々に次のようなことを明瞭にしてくれる。1888年のメッセージは：

1. 十字架をさらに顕著に示すもの
2. 信仰による義認の提示
3. キリストの義＝律法への服従に招くもの

4. 後の雨により、大いなる叫びで宣布されるべき第三天使の使命
5. 人間から目をそらしキリストにのみ注目させるもの
6. 大いなる叫びの始まり
7. 信仰による義認こそ第三天使の使命の神髄であった

そこで単純な論法で次のようにまとめることができよう。

1. 第三天使の使命は至聖所におけるキリストの働きに向けるものであるから（注）、1888年のメッセージは至聖所に高く上げられたキリストの血による最後の贖いの働きに関するものであった。
 (注)「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに天の聖所へと指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は至聖所に向けられる。」（初代文集 p417）
2. 大いなる叫びは神の印、即ち完全な品性を持つ人々によってのみ宣布されるものであるから（注）、1888年のメッセージはまず神の民に神の印、即ち完全な品性をもたらし、み業を外部に完成させるものであった。
 (注) 5 T p214, イザヤ書4 : 2~5, 44 : 22, 23, 55 : 5, 62 : 2, 3, 黙示録3 : 12, 7 : 2, 14 : 1, 18 : 1, エゼキエル書43 : 1~3,

神の民の心を至聖所におけるイエスの奉仕に向けることによって、1888年の信仰による義のメッセージは、それ以前よりもさらに成熟した概念であったということを知る。それは、黙示録の14章の背景において説かれた信仰による義であり、聖所の清めと一致する働きであった。それは、神の奥義を成就するということのメッセージであった。この1888年の信仰による義の説教を我々はその意味するところのことを明確に心に刻み込まなければならない。我々が天の聖所の第二の部屋、すなわち至聖所におけるキリストの働きにおいて、我々のためになされる働きを理解する時にのみ、1888年のメッセージがもたらすところの力、その偉大さというものを理解することができるのである。確かにその時、神の民に咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義をもたらす時が来ていたのである。神の民は、イエスが全ての罪を除去しようと待っておられる第二の部屋に入らなかったのである。1888年に天におけるイエスの奉仕によってそこから輝く栄光で全地を照らす好機が神の民に来ていたのである。何年もの間、教会は2,300日の預言という教理を持ち続け、そして聖所を清めるために1844年に至聖所にイエスが入られたということを伝えて来た。しかし、教会は、その素晴らしいダイナミックな教理の祝福をいただくことに失敗したのである。教会は、世界にイエスの第二の部屋での奉仕が人々の生活のうちに完成するところのことをデモンストレーションすることに失敗したのである。さて、神はご自分の選ばれた器を通して、天の証人としてイエスを提示し、墮落した人類を最も素晴らしい富で買戻し、そして神の満ち満ちた全てのもので彼らを満たすというその祝福が提示されたのである。ここで、主が「選ばれた」器のメッセージの抜粋を読むことによって、神の栄光で全地を照らすところのその光の輝きを見ていただきたい。次に挙げる言葉はA・T・ジョーンズの「クリスチャン品性完成への道」の第14章からの抜粋である。この本は、1888年からしばらく経った1905年に出版されたものである。

クリスチャン品性完成への道

第十四章 慰めの時

さて、今や各時代の望みの達成される時、真の聖所が本当に清められる時、福音の働きが完成し、神の奥義が確かに達成される時——今日こそ、世にあったところの全ての時の終わり、イエスにある信者

— すなわち、神の輝かしい祭司制度の祝福されたこの対象であるところの信者、そして、天の眞の聖所における素晴らしい仲保の対象であるところの信者 — が天の恵みの満ち満ちたものの全てで満たされ、そして咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義がもたらされる時である。

これこそが、まさに眞の聖所におけるキリストの祭司職、又、奉仕の目的なのである。その祭司職は十分ではないだろうか？彼の奉仕はその目的を達成するのに十分ではないだろうか？まことにその通りである。その方法によってのみ、この事が達成され得るのである。何人と言えども、自分の生活にその咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義をもたらしことはできないのである。それがなされるとするならば、キリストの祭司職、その奉仕によってのみ、つまり、ご自身を与えられたお方の祭司職、奉仕によってのみなされるのであり、全ての魂にこのことが達成されて、そして神のみ前において責められるところのない者となり神のみ前に提示されるのである。

眞理に心を傾け、そして、そのことをしていただきたいと望む全ての者になされるのである。キリストの祭司職と奉仕のみが、することができるのである。今やそのことが、永遠に完全に有効とされる時なのである。それならば、我々はそれをしてくださるお方を信じ、それをしていらっしゃるお方に信頼し、永遠に完全にそれをしてくださる方を信じようではないか？

「もう時がない」と書かれているその働きが終わる時、これが今の時である。ではどうして、これ以上、時を延ばしていいだろうか？全ての信者の望みがあるところの、又、約束されたところの我々の憐れみ深い大祭司としての働きが十分であるなら、彼の犠牲、彼の奉仕が十分であるならば、何故、これ以上、咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義をもたらしことにこのように時が延びていいのだろうか？彼自身がなさりたいと思っておられる彼のみがそれを可能になさることができるのであるから、それに信頼しようではないか？我々の告白する人であり、大祭司であるところのイエス・キリストにゆるぎのない信仰をおく全ての魂に属するあらゆる恵みを受けようではないか！

我々は小さな角、罪の人、不法の者がどのように天の聖なる祭司職、聖所の奉仕の代わりに地上的な人間の罪深い祭司職、奉仕、聖所に勝手に置き換えてきたかを見てきた。この祭司職においては、不法の秘密の働きというのは、罪人が司祭に罪を告白し、そして又、罪を続けるのである。確かに、そのような祭司職、奉仕には、たとえ罪を告白した後でも罪を犯し続ける以外に力を与えることはできないのである。しかし、悲しいことに、次のような疑問が残るのではないだろうか？イエスの祭司職、その働きを本当に信じていながら、罪を告白している者たちが、なお罪を犯し続けているというのはどういうことか？

このことは、我々の大祭司に、又、彼の犠牲、彼の祝福された奉仕に対して公正だろうか？我々が、キリストとその犠牲、その奉仕を實際上、「荒す憎むべき者」のそれと同じレベルにおくということ、そして、キリストの奉仕は、不法の秘密のそれと同様に何の力もないとしていいのだろうか？願わくは、主がご自分の教会とその民を今日、永遠に救い出してくださるように。そして、これ以上時が延びないように。そして、これ以上、我々の大祭司が低くされ、そして彼の犠牲、彼の輝かしい奉仕が、低くされることがないように。

我々の大祭司に対する信頼を眞実なものとし、本当に絶対的なものとしようではないか？プロテスタントの人たちは、しばしば、司祭に全的に信頼しているカトリックの盲目的な無知について語る。いかなる地上的な祭司職をも信頼し、尊敬するということは、その思想は正しい。そして、その司祭に絶対的な信頼を置くということは、永遠に正しいのであるが、それは、正しい祭司にその信頼は置かれなければならない。このような偽りの祭司職に信頼を置くことは、最も恐ろしい腐敗をもたらす。しかし、祭司に対する絶対的な信頼という原則は永遠に正しいのである。そして、イエス・キリストが祭司なのである。故に、イエス・キリストを信じる全ての者は、彼のなされた犠牲、眞の聖所における祭司職、

彼の奉仕を信じる者は、罪を告白するばかりでなく、咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義を彼の心と生活にもたらすという、キリストの大祭司に絶対的な信頼を置かなければならない。

永遠の義であるということを感じていただきたい。ただ単に今日の義、そして、明日罪を犯し、又、義、そして又、罪というのではない。それは、永遠の義ではない。永遠の義というのは、信じて告白した者の生活に永遠に留まるのである。そして、なお信じ、なお全ての罪を犯す代わりに永遠の義を受けるのである。これのみが、罪からの永遠の贖いである。この言い表しようのない祝福は天の聖所から神の尊い、恵み深い賜物として授けられるのである。それで彼は我々のために天の聖所で祭司職、そして、奉仕の働きを設立されたのである。

それ故に、今（今日と言われる日に）かつてないほどに訴えているのである。全ての民に神の言葉は「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。」（使徒行伝3：19，20）と。

主の来臨の時、万物更新の時は、すぐそこまで来ている。そして、イエスが来られる時は、ご自分の民を迎えるためである。その時、彼はご自分の教会を、栄光の教会を、しみもしわもそのたぐいのものが一切なくて、清くて傷のない教会を迎えられるのである。その時、ご自分の全ての聖徒たちに完全にご自身が反映されているのをご覧になるのである。

そして、彼がこのように来られる前に、神の民はそのような状態になっていなければならない。彼が来られる前に我々はイエスの完全な御像に、完全な状態にされていなければならないのである（エペソ4：7，8，13）。この完全な状態、すなわちイエスの御像が信者のうちに完全に反映される。これが、神の奥義の成就である。すなわち栄光の望み、あなたがたのうちにいるキリスト、栄光の望みなのである。この達成は、神の奥義の成就であるところの聖所の清めのうちに完成される。それは完全に咎を終わらせ、完全に罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義をもたらす、預言者と幻を封じ、いと高き者に油を注ぐ時である。

今日は、イエスの来臨、万物更新が間近に迫っている時であり、主の来られる時と万物更新に先立って聖徒たちの最終的な仕上げが先行するのである。我々はあらゆる証拠によって知っている。我々は今、慰めの時、すなわち後の雨の時にいることを知っている。それは我々が、我々に対抗する全ての罪が除去される時でもある。罪の除去は聖所の清めそのものである。それは我々の生活に全ての咎を終わらせることである。我々の品性に全ての罪に終わりを告げることである。それは、イエス・キリストを信じる信仰によって、神の義がもたらされ、永遠にそれだけが宿るようにされることである。

この罪の除去は後の雨の慰めを受けることに先行しなければならない。何故なら、アブラハムの祝福を持つ者にのみ約束の御霊がくだるからである。それは罪から贖われた者にのみ与えられるものであり、アブラハムの祝福がくだるのである。（ガラテヤ3：13，14）。それゆえにかつてないほど我々は悔い改めて改心しなければならない。それは我々の罪が除去されて、永遠の義がもたらされるためであり、そして、それは聖霊の注ぎで満たされるためであり、この後の雨の慰めの時に我々のものとなるのである。これら全てのことは、御国の福音を収獲させ、熟させるところのメッセージが上からの力によって全世界に宣べ伝えられるためであり、それによって全地がその栄光によって満たされるためである。

クリスチャン品性完成への道

第十七章 結論

主なるキリスト、神の御子は天から下ってきて肉となられ、神の子として人のうちに宿った。これは、クリスチャン信仰の中に永遠に定着した事実である。彼は我々の違反の故にカルバリーの十字架で死な

れた。これはクリスチャン信仰の永遠の定着事実である。

彼は我々の義認のために死から復活された。これはクリスチャン信仰の永遠の定着事実である。

彼は我々の仲保者として天に上がられ、神の御座の右に座られた。これはクリスチャン信仰の永遠に定着した事実である。

彼は天父の御座のところで祭司であられ、メルキゼデクに等しい永遠の祭司であられる。これはクリスチャン信仰の永遠に定着した事実である。

神の御座の右に座され、ご自分の御座で祭司として、キリストは人手によらず主によって設けられた幕屋なる聖所で奉仕しておられるということである。これはクリスチャン信仰の定着した事実である。

そして彼は、力と大なる栄光のうちにご自分の民を迎えるために、ご自分の輝かしい栄光の教会を迎え、世を裁くために、天の雲のうちに再びおいでになる。これはクリスチャン信仰の永遠に定着した事実である。

キリストは肉において生きられ、十字架で死なれ、死からよみがえり、天にお帰りになり、天の御座に座されたことは全てのクリスチャン信仰の定着した事実でなければならない。それは信仰が真実で十分であるためである。

この同じイエスが、その御座で神の御座の右で祭司であられることは、全てのその信仰が真実で十分であるために、全てのクリスチャンの信仰の定着した事実でなければならない。神の御子キリストは神の御座の右で祭司であられることは、人手によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられるキリストは、彼らのその信仰が真実で十分であるために、クリスチャン信仰に定着した事実でなければならない。

この神の御座の右で祭司であられる神の子キリストに対する真の信仰、又、真の奉仕、真の聖所そして、その彼の祭司職、奉仕が、咎を終わらせ、罪に終わりを告げ、不義を贖い、永遠の義をもたらす——この真の信仰が彼に来る者を完全にするのである。それは神の印に彼らを備え、ついにいと高き者に油を注ぐことに備えるのである。

この真の信仰によって、この信仰を持つ全ての魂は、彼のうちに彼の生涯のうちに、咎が終わり、罪の終わりがもたらされ、全ての不義の贖いがなされ、永遠の義が彼の生涯に永久にもたらされたということを知ることができるのである。これを彼は確信することができる。何故なら、神の言葉がそう言っているからである。真の信仰は神の言葉を聞くことによって来るからである。

故に、この時にイエスを信じる全ての信者は、この真の信仰の力のうちに聖なる奉仕をしておられる我々の大祭司、又、我々のために取り成しをしておられるお方の功しに絶対的な信頼を置くようにしよう。

この真の信仰の確信のうちにイエスの全ての信者は、永遠に長い安息に入ろう。このことが完成されることを神に感謝しよう。あなたの生活に違反が終わり、その悪から永遠に解放されるようにしよう。あなたの生活は罪に終わりを告げ、あなたは永遠にそれから解放される。不義が贖われ、あなたは永遠にそれから清められる。尊い注ぎの血によってあなたの生活に永遠に義がもたらされて、あなたを支え、導き、救い、キリストの死によって、永遠に贖われる。完全に永遠に贖われること、これらが我々の大祭司であり、仲保者であられるイエスを信じる者にもたらされるのである。

この真の信仰の義と平安と力のうちに、全てそれを知る者は、世界の果てまで全ての人にキリストの祭司職の輝かしい訪れ、清め、神の義が成就されること、慰めの時が来て、そして、まもなく、主がおいになって、ご自分の聖徒たちによって誉れが帰され、その日に信じる者の全てのうちにあがめられる日が来る時、彼はご自分の民を、しみもしわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のないものとして迎えにおいでになることを伝えよう。

1888年のメッセージに対する応答

1888年のメッセージはわが民に教会によって受け入れられなかったという証拠は自明の理である。まず第一に、これは時の評価は言い争うことのできないものである。1888年以来、益々深刻なラオデキヤ状態に陥り、後の雨、大いなる叫びは長引き、再臨は遅らされている事実を認めない人はいないはずである。神の教会は聖所の清めの経験に入っているだろうか？ 咎を終わらせ、不義を贖い、罪に終わりを告げ、その代わりキリストの永遠に罪なき品性にあずかっているだろうか？ 神の印、神の名、神の品性、そして、全地はその栄光によって照らされているだろうか？ 教会は至聖所におけるキリストの取り成しの祝福、完全な品性をいただいて世にデモンストレーションしているだろうか？ こういうことがなされていない事実を全て認めることができるはずである。そして、第二に預言者エレン・G・ホワイトが、我々の教会はこのメッセージを受け入れなかったということを幾度も繰り返して言っておられるという事実を。第三にその当時おられた方々の幾人かが、わが教会がこのメッセージを拒絶したという証言をしているということ。そして第四に、A・T・ジョーンズ自身がGCB（1893年の研究7 第三天使の使命）にはっきりと証言していることは、「では、兄弟たちはミネアポリスで何を拒んだのであろうか？ 大いなる叫び……それでは、彼らが立っていた恐ろしい立場にいた兄弟たちはミネアポリスで何を拒んだのであろうか？ 彼らは後の雨、すなわち第三天使の使命の大いなる叫びを拒んだのである。」

「兄弟たちよ、今晚あそこで拒んだことを我々は捕える時が来たのである。我々のうちひとりとしてミネアポリスで我々のために神が備えておられた素晴らしい祝福を夢見ることのできる者はいなかった。そして、4年間我々はこれを楽しむはずであった。もし、神が送られたメッセージを受け入れる用意ができていたならば、我々は4年も進んでいたはずだったし、今晚、我々は大いなる叫びの素晴らしい真つ只中にいたはずである。預言の霊は我々の頭上に祝福が釣下げられていたと言っていないだろうか？」

ルーテルのメッセージと違うか

全世界を照らすはずの大いなる叫びの光が、世界から閉ざされてしまったというこれ以上の明確な証言を聞くことができるだろうか？ 教会は後の雨、大いなる叫びを受け損じたのである。ある人たちは、1888年のメッセージは、ルーテルやウェスレー、宗教改革者たちの信仰による義のメッセージ以上のものではなかったと思っているが、彼らは黙示録14章の永遠の福音を理解していたであろうか？ ルーテルは第三天使の使命そのものを決して持っていなかった。ウェスレーは大いなる叫びのメッセージを持っていなかった。彼らのキリストの義における経験というのは第一の部屋におけるキリストの奉仕から与えられる光と祝福を受けていたのであり、それ以上のものではなかった。A・T・ジョーンズ、又、エレン・G・ホワイトが言っているように、第二の部屋、至聖所におけるキリストの奉仕の祝福は、第一の部屋から与えられる祝福と違うということ、これをアドベンチストは明確にしていなければならない。至聖所における祝福は罪の除去であるということ、それに続いて後の雨による神の印、完全な品性という祝福が与えられるのであるということ、これが大いなる悩みを通過させ、生きて主を迎える備えをさせる特別なメッセージであるということをおぼろげに忘れては、アドベンチストの意味を失ってしまうのである。

1888年の信仰による義のメッセージはどこが違うか？

1. 信仰を向ける場所は至聖所であった。「そうしなければ、この時代にあって必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることも不可能である。」GC下222
2. 祝福は永久の罪の除去、後の雨、神の印であった。
3. 結果は大いなる叫び、生きて主を迎える準備をさせるものであった。

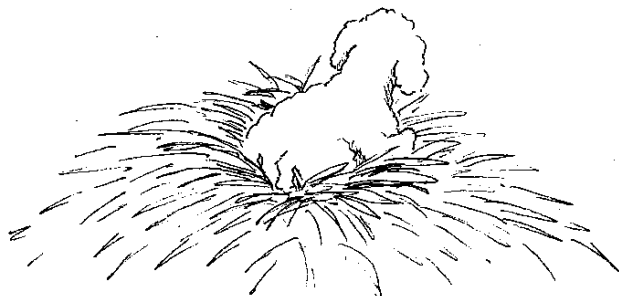
又、罪の許しもこの最後の贖いにおいて永久にゆるしと記されて、ジョーンズが言うように、罪を犯さない状態に仕上げられてしまう神の賜物であるということ。これを覚えていなければならないのである。

ユダヤ人がモーセの律法に記されていたことに安んじて、誇りながら、モーセの律法が示していたところのお方を拒んでしまった時にどういうことが起こったのか、そしてプロテスタント諸教会が、三天使の使命を足に踏みにじりながら、イエスがその奉仕を変えられたことに気がつかなかった結果どうなってしまったか、過去の経験からよく学んでいなければならない。さもなければ、2,300日の預言、聖所の清め、裁き、調査審判等のこうした教理は単なる天における帳簿上の働きであって、この地上の神の民に何らの力をもって迫るものもなければ、何の徳もないのである。そのことの不理解のために、後の雨は降らず、大いなる叫びが聞かれぬのである。そのために時が益々延ばされて、我々の敵に我々のこれらの教理の聖所の清めの教理は全く「無味単調な」「重要でない」「愚直な」「メンツを立てる」「哲学的現象」と言われる機会を与えてしまったのである。願わくは、神が我々を憐れんでくださるよ

うに。
1888年に与えられた信仰による義認は至聖所から与えられる祝福、即ち信仰によって高く上げられた神の小羊イエスを仰ぐ時に、人間の栄光がちりに伏され、人にはできないこと、人には何一つできないことを見て、神にはできないことはないとその約束を素直に信じて、悔い改めと信仰をもって裁きの座に近づくならば、イエスは、ご自分の民に永遠の罪の除去、永遠に罪をゆるし、ご自分の永遠の義を着させ、「ここに神の戒めを守」る聖なる民があるということを全宇宙に知らせ、それによって諸国民が、神が主であることを知るように至らせるところのダイナミックなメッセージであった。それが外部における神のみ業を稲妻のごとく、山火事のように終わらせるところのメッセージであったことを覚える時、我々はどんなに大きな損失を被ってしまったかということに悔いざるを得ないのである。1888年のメッセージは主の民に「使徒時代以来かつて見られてなかったような初代の敬虔のリバイバル」……「神の霊と力を」注ぎ（大争闘下巻 p190）、次のことを成就させるはずのものであった。

「神のしもべたちは、きよい献身の喜びに顔を輝かせ、天からの使命を伝えるために、ここかしこ奔走する。全世界の幾千の声によって、警告が発せられる。奇跡が行なわれ、病人はいやされ、しるしと不思議が信じる者に伴う。サタンもまた、偽りの不思議を行ない、人々の前で天から火を降らすことさえする（黙示録13：13参照）。こうして地上の住民は、立場を明らかにしなければならなくなる」（大争闘下巻 p382, 383）

今回は、聖所の光からローマ人への手紙に光をあてて、パウロを通して語られている信仰による義を考察しながら、1888年のメッセージは何であったのかを研究してみたいと思う。



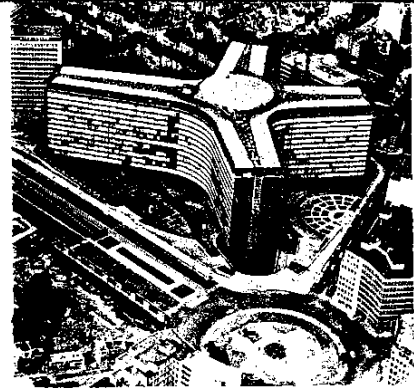
金城重博

時 の 兆

EC (欧州) 統合、預言の成就か？

「1992年12月31日を期して、欧州に3億2000万人の巨大な市場が誕生する。ただしEC委員会の予定表どおりに事が運べば、という条件つきである。EC加盟国の市場統合という夢が大きければ大きいほど、そして夢が実現に近づけば近づくほど、各国の思惑の違ひも表面化してくる。EC内部は、政治的統合まで射程に入れた積極派と『欧州合衆国』構想を一蹴するサッチャー英首相らとに大きく二分されている。日米両国をはじめとする域外諸国はECが巨大な保護主義のとりでと化すことを恐れている。あと4年、市場統合で欧州はどこへ行こうとしているのか。」

「市場統合への道は、妥協と遅延の道となるだろう。しかし、いつかはそれが現実となる。92年の統合案に最も強硬に反発する人でさえ単一市場の理念は支持している。どうやら3億2000万消費者を擁する単一欧州市場創出の理念は、とうの昔に機が熟しているらしい。域内の国境や税関を取り払った一つの欧州の出現は、もう避けられない。欧州経済がしぶとく生き残るには、市場統合しかないのだ。そして、それは欧州究極の夢の実現に不可欠な一歩でもある。真の政治的統合を果たし、世界に冠たる欧州を復活させるという夢の。」 ニューズウィーク 1988. 11. 10



ベルギーのブルッセルに所在する
EC本部・十字架の形をしている

EC (ヨーロッパ共同体) はEEC (ヨーロッパ経済共同体) とECSC (ヨーロッパ石炭鋼共同体) とEUROTAM (ヨーロッパ原子力共同体) が統合されたものを言う。

このECは経済的な統合を目指すばかりでなく、政治的に統合し、そして究極の目的は道徳的に一つとなることだということに気付いている人は少ない。それはカトリックに鼓舞され、カトリックの支配する国々が一つとなって「聖ローマ帝国」を再び復活させ、今度は世界を支配することをねらっているプログラムであることを忘れてはならない。

ジーン・モーネットも、EC委員長ドロールもカトリックである。アメリカン・インスティテュート・オブ・マネージメントの会長ジャクソン・マーチンデル氏は言う：「共産主義が世界を制覇するか、それともカトリックがそれを阻止するかである。共同体 (EC) は誰が設立したか？金かけて言う。カトリックである。」 New York Post 8-22, 1962

EECの創立者ジーン・モーネット（フランスの経済学者、カトリック）は言う：
 「我々が今日ヨーロッパでやっていることは、ただ、経済的な事、そして政治的な事だけではない。それは道徳的な事である。これが究極的なポイントである。」 Look 7-17, 1962

今日ほど黙示録17章の預言の成就に注目しなければならぬ時はない。17:12, 13の10の角はローマから分裂した国々を表わしている。「彼らは心を一つにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える」。1992年に経済統合が成り立てば、政治的統合は「自ずとついてくる」とモーネットは言った。

TIME 10-6, 1961

ヨーロッパ合衆国が出来上がれば、ローマ・カトリックがそれに乗ることはたやすいことである。「時は熟している」と人々は感じている。わが教会は備えをするであろうか？ 神の僕らの額に生ける神の印が押されるまで四方の天使が嵐を引き止めるようにさせている神のあわれみよ！



EECの創立者ジーン・モーネット



「皇帝」ドローールの挑戦

欧州統合の夢を蘇生させた異色委員長のビジョンを探る

●ドローールEC委員長に聞く92年末までに主要懸案は決着する

EC官僚が敬遠するブリュッセル暮らし
 待遇は抜群なのにEC本部勤めはなぜこうも嫌われる

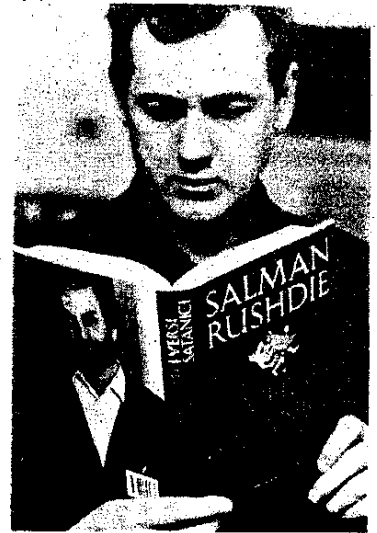
人心を騒がす 「悪魔の詩篇」



Mohammed



Mohammed II



来週発売されるサルマン・ラシディ氏の「悪魔の詩篇」のイタリア語版 (A P= 共同)

英作家サルマン・ラシディ氏にイランの最高指導者ホメイニ師が死刑宣告をした事に対する反応は大きい。身震いさせる発言である。黙示録9章にイスラム教の出現を「底知れぬ所の穴から」と表現されている。「底知れぬ所」という表現は黙示録に数回出てくるサタンの権力の出現する時に使われるようである。黙示録11:7の「底知れぬ所からのぼってくる獣」のことを大争闘上巻344, 345ページにフランス革命を起こしたサタンの起源、無神論権力と言われている。神はかつて背教イスラエルを

罰するために狂信的マホメッド教を用いられた。しかし、これは背教イスラエルを罰するためにバビロンを神は用いられたことと同じである。イスラムもサタンの勢力である事に異論はないであろう。こんな事を言うに私に対してもホメイニ師は死刑宣告をするかな？

しかも驚いたことにイラン駐バチカン大使ガファリ氏がラシディ氏を処刑するために自ら手を下してもよいと発言したというのである。ローマ・カトリックはかつて過去にイスラムからどんな仕打ちをされたかを覚えているからか、あるいはあらゆる国々に使っている手、即ち妥協、和平工作で相手を陥れるまではカメレオンのようにふるまうのか。「ローマ教会の抜け目なさや狡猾さには驚くべきものがある。この教会は、何が起こるのかを読みとることができる。……時機を待っているのである。」「自分が手を下す時が来たら自分自身の目的を押し進める」のである。「この教会は自分が無力であるところでは寛大である。オコンナー司教は、『カトリックの世界に危険を及ぼすことなく反対政策を実施できるようにするまで、新教の自由をがまんしているにすぎない』と言っている。」大争闘下巻339、341、320

大争闘を書かれたホワイト夫人が生きておられたなら、バチカンは今日、あるいは近い将来、何と云うだろうか？しかし、神は世の人を大欺瞞から目覚めさせるために、バチカンの世界支配、迫害復活、反プロテスタンティズム（大争闘下巻321）を暴露する聖霊の力を受ける神の民を待っておられる。バビロンの罪、法王権の恐るべきことがみな暴露される時、彼らは激怒してホメイニ師以上のことを宣告するであろう。（大争闘下巻376、黙示録13章、ダニエル書11:44）

ピオ11世は「ドイツ政府元首ヒトラーが共産主義並びに虚無主義とあくまで戦う決意の人であることを認め、喜びにたえない」と言ったが、やがて、同じことが神の民についても言われるであろう。あの「聖バーソロミューの虐殺」で2ヶ月間に国民の花とも言うべき7万人が殺害された時、聖アンジェロ城の大砲は祝砲を放って、聖職者たちの喜びは非常なものであった」と言われている。（大争闘上巻348）



ヒトラーとドイツの監督ミュラーと
アッポット・シャチライターとナチ黨員指導者達



チャールス9世、司祭、高位聖職者らにせきたて
たてられて聖徒虐殺に署名する 1572年 8月

原因のあるところには、必ずその結果が伴う。義務であると知りながらも、それが自分の好みにあわないからと言って、故意にその信念をもみ消すものは、ついに、真理と誤りの区別をする能力を失ってしまう。理解力はにぶり、良心は無感覚になり、心はかたくなになり、魂は神から離れてしまう。神からの真理のメッセージが拒絶または軽視されるときに、教会は暗黒に襲われる。信仰と愛は冷え、離反と分離が起こる。教会員は、世俗の追及に興味と精力を集中し、罪人は心をかたくなにして悔い改めないのである。

大争闘下巻79

サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするとき、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである。……これらイエスの反対者たちは、人々が子供の時から尊敬するように教えられ、彼らの権威には絶対に従うように習慣づけられていた、その者たちであった。人々は、「なぜわれわれの役人たちや学者たちはイエスを信じないのだろうか。もしこの人がキリストであるなら、こうした敬虔な人たちがこの人を受け入れないことがあろうか」と問うた。ユダヤ民族に彼らの贖い主を拒否させたのは、このような教師たちの影響であった。

大争闘下巻361

